感染症発生動向調査事業報告書

－平成２４年版－

山梨県福祉保健部

目　　次

Ⅰ　事業概要
１　感染症発生動向調査事業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
２　対象感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
３　地域区分と定点医療機関数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅱ　患者発生状況
１　全数把握対象感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
２　定点把握対象感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2-1 インフルエンザ定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・ 6
○インフルエンザ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）
2-2 小児科定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
○ ＲＳウイルス感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
○ 咽頭結膜熱 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
○ Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
○ 感染性胃腸炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
○ 水痘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
○ 手足口病 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
○ 伝染性紅斑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
○ 突発性発しん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
○ 百日咳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
○ ヘルパンギーナ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
○ 流行性耳下腺炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
2-3 眼科定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
○ 急性出血性結膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
○ 流行性角結膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
2-4 性感染症定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
○ 性器クラミジア感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
○ 性器ヘルペスウイルス感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
○ 尖圭コンジローマ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
○ 淋菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
2-5 基幹定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
○ 細菌性髄膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
○ 無菌性髄膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

○ マイコプラズマ肺炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
○ クラミジア肺炎（オウム病を除く） ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
○メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・ 30
○ ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
○ 薬剤耐性緑膿菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
○ 薬剤耐性アシネトバクター感染症・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

Ⅲ 病原微生物検出状況
1 ウイルス検出状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
2 細菌検出状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

Ⅳ 参考資料
1 感染症発生動向調査の指定届出機関一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・ 36
2 全数把握対象感染症の報告数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
3 定点把握対象感染症の報告数と定点当たり報告数 ・・・・・・・・・・・ 39
4 平成 23 年と 24 年における定点当たり報告数の比較 ・・・・・・・・・・ 40
5 定点把握対象感染症の定点当たり報告数の推移 ・・・・・・・・・・・・ 41
6 感染症発生動向調査の調査報告週対応表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 42

Ⅰ　事業概要

1　感染症発生動向調査事業

平成 11 年 4 月施行の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」(以下「感染症法」という）により、従来行われてきた感染症サーベイランス事業が充実・拡大整備され、新たに感染症発生動向調査として行われた。(感染症法第 3 章　感染症に関する情報の収集及び公表、第 12 条、第 14 条)

その後、平成 19 年 4 月に感染症法の改正があり、発生動向調査の対象疾病の再分類や結核予防法の統合等、大幅な変更があった。また、平成 20 年 1 月から風しん及び麻しんは五類感染症の定点把握の対象から五類感染症の全数把握対象に変更された。5 月には鳥インフルエンザ（H5N1）が二類感染症に追加されるとともに、感染症の類別に新型インフルエンザ等感染症が追加された。平成 23 年 2 月にはチクングニア熱が四類感染症に、薬剤耐性アシネトバクター感染症が五類感染症（定点）に追加された。

山梨県では情報を週及び月単位で収集・分析し、関係機関に還元するとともに、ホームページを通じて県民に公開している。

2　対象感染症

平成 24 年 12 月末現在、全数把握対象は 77 疾患、定点把握対象は 26 疾患の計 103 疾患を調査対象としている。

全数把握対象（77 疾病）

	対　象　疾　病
一類感染症（7 疾病）	(1)エボラ出血熱、(2)クリミア・コンゴ出血熱、(3)痘そう、(4)南米出血熱、(5)ペスト、(6)マールブルグ病、(7)ラッサ熱
二類感染症（5 疾病）	(8)急性灰白髄炎、(9)結核、(10)ジフテリア、(11)重症急性呼吸器症候群（SARS、病原体が SARS コロナウイルスであるものに限る)、(12)鳥インフルエンザ（H5N1）
三類感染症（5 疾病）	(13)コレラ、(14)細菌性赤痢、(15)腸管出血性大腸菌感染症、(16)腸チフス、(17)パラチフス
四類感染症（42 疾病）	(18)E 型肝炎、(19)ウエストナイル熱（ウエストナイル脳炎を含む)、(20)A 型肝炎、(21) エキノコックス症、(22)黄熱、(23)オウム病、(24)オムスク出血熱、(25)回帰熱、(26)キャサヌル森林病、(27)Q 熱、(28)狂犬病、(29)コクシジオイデス病、(30)サル痘、(31)腎症候性出血熱、(32)西部ウマ脳炎、(33)ダニ媒介脳炎、(34)炭疽、(35)チクングニア熱、(36)つつが虫病、(37)デング熱、(38)東部ウマ脳炎、(39)鳥インフルエンザ（H5N1 を除く)、(40)ニパウ

	イルス感染症、(41)日本紅斑熱、(42)日本脳炎、(43)ハンタウイルス肺症候群、(44)B ウイルス病、(45)鼻疽、(46)ブルセラ症、(47)ベネズエラウマ脳炎、(48)ヘンドラウイルス感染症、(49)発疹チフス、(50)ボツリヌス症、(51)マラリア、(52)野兎病、(53)ライム病、(54)リッサウイルス感染症、(55)リフトバレー熱、(56)類鼻疽、(57)レジオネラ症、(58)レプトスピラ症、(59)ロッキー山脈紅斑熱
五類感染症（16 疾病）	(60)アメーバ赤痢、(61)ウイルス性肝炎（E 型肝炎及び A 型肝炎を除く）、(62)急性脳炎（ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く）、(63)クリプトスポリジウム症、(64)クロイツフェルト・ヤコブ病、(65)劇症型溶血性レンサ球菌感染症、(66)後天性免疫不全症候群、(67)ジアルジア症、(68)髄膜炎菌性髄膜炎、(69) 先天性風しん症候群、(70)梅毒、(71)破傷風、(72)バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(73)バンコマイシン耐性腸球菌感染症、(74)風しん、(75)麻しん
新型インフルエンザ等感染症（2 疾病）	(102)新型インフルエンザ、(103)再興型インフルエンザ

定点把握対象（五類感染症・26 疾病）

	対　象　疾　病
小児科定点（11 疾病）	(76)RS ウイルス感染症、(77)咽頭結膜熱、(78)A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎、(79)感染性胃腸炎、(80)水痘、(81)手足口病、(82)伝染性紅斑、(83)突発性発しん、(84)百日咳、(85)ヘルパンギーナ、(86)流行性耳下腺炎
インフルエンザ定点（1 疾病）	(87)インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）
眼科定点（2 疾病）	(88)急性出血性結膜炎、(89)流行性角結膜炎
STD 定点（4 疾病）	(90)性器クラミジア感染症、(91)性器ヘルペスウイルス感染症、(92)尖圭コンジローマ、(93)淋菌感染症
基幹定点（8 疾病）	(94)クラミジア肺炎（オウム病を除く）、(95)細菌性髄膜炎、(96)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、(97)マイコプラズマ肺炎、(98)無菌性髄膜炎、(99)メシチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(100)薬剤耐性アシネトバクター感染症、(101)薬剤耐性緑膿菌感染症

3　地域区分と定点医療機関数

本県の人口及び医療機関の分布を考慮し、罹患状況を報告する患者定点と病原体検査のための検査材料を採取する病原体定点を下表のように設定した。（参考資料１「感染症発生動向調査の指定届出機関一覧表」参照）

		中 北	峡北支所	峡 東	峡 南	富士・東部	計
患者定点	小児科定点	8	5	4	2	5	24
	インフルエンザ定点	13	8	7	3	9	40
	眼科定点	3	2	2	0	2	9
	ＳＴＤ定点	3	2	2	0	2	9
	基幹定点	3	2	2	1	2	10
	合計	30	19	17	6	20	92
病原体定点	小児科定点	2	0	0	0	1	3
	インフルエンザ定点	1	1	1	1	1	5
	眼科定点	1	0	0	0	0	1
	ＳＴＤ定点	0	0	0	0	0	0
	基幹定点	3	2	2	1	2	10
	合計	7	3	3	2	4	19

Ⅱ　患者発生状況

1　全数把握対象感染症

山梨県及び全国における平成 24 年の全数把握対象感染症の報告数を参考資料２に示した。

《一類感染症》
　報告はなかった。

《二類感染症》
　二類感染症 5 疾患のうち、結核 145 例の報告があった。

《三類感染症》
　三類感染症 5 疾患のうち、細菌性赤痢 2 例（ソンネ菌 1 例、フレキシネル菌 1 例)、腸管出血性大腸菌感染症 18 例（026：11 例、0157：7 例）の 2 疾患 20 例の報告があった。

《四類感染症》
　四類感染症 42 疾患のうち、マラリア（1 例)、レジオネラ症（11 例）の 2 疾患 12 例の報告があった。

《五類感染症》
　五類感染症 16 疾患のうち、ウイルス性肝炎（E 型肝炎及び A 型肝炎を除く）(2 例)、急性脳炎（ウエストナイル脳炎、西部馬脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く）(1 例)、クロイツフェルト・ヤコブ病(3 例)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症(2 例)、後天性免疫不全症候群(4 例)、梅毒 (2 例)、バンコマイシン耐性腸球菌感染症（1 例)、風しん（11 例)、麻しん(4 例)の 9 疾患 30 例の報告があった。

《新型インフルエンザ等感染症》
　報告はなかった。

２　定点把握対象感染症

山梨県および全国における平成 24 年の疾患別報告数と定点当たり報告数を参考資料３に示した。本県で患者報告数が多かった疾病は、インフルエンザ（10,972 例）、感染性胃腸炎（8,768 例）、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎(2,347 例)、水痘（927 例）、流行性耳下腺炎(640 例)であった。定点当たりの報告数が全国に比べて高かった疾病は、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎(山梨県 97.79､全国 88.18)､流行性耳下腺炎(山梨県 26.67､全国 22.76)、クラミジア肺炎（山梨県 4.10、全国 1.90)、の 3 疾患であった。急性出血性結膜炎と薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告例はなかった。

平成 23 年と 24 年における定点当たり報告数の比較を参考資料表４に示した。定点当たりの報告数が前年より上昇した疾病は、マイコプラズマ肺炎（2.44 倍)、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎（1.63 倍)、感染性胃腸炎（1.37 倍)、など 8 疾病であった。

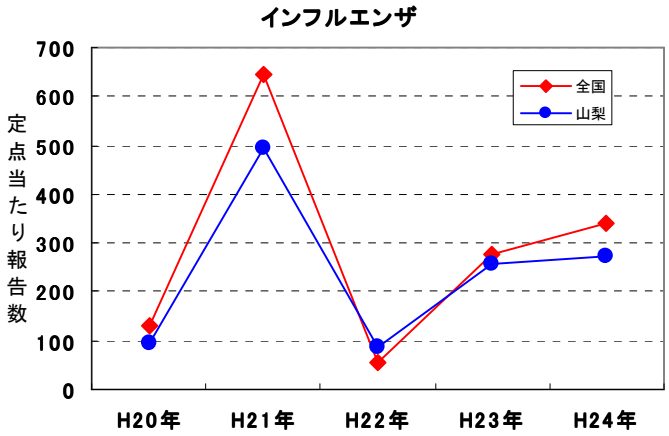
２－１　インフルエンザ定点から報告された感染症

インフルエンザ定点は 40 で、県内全保健所管内にあり週報として報告される。

○インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

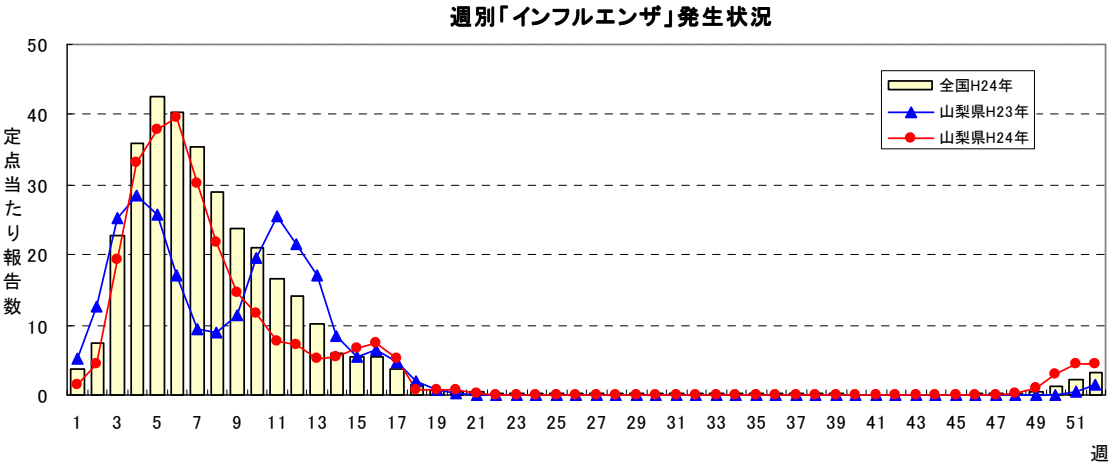
定点医療機関から 10,972 例（定点当たり報告数 274.30）の報告があり、前年（10,344 例）よりやや多かった。

最近 5 年間の状況は全国とほぼ同様の傾向であった。



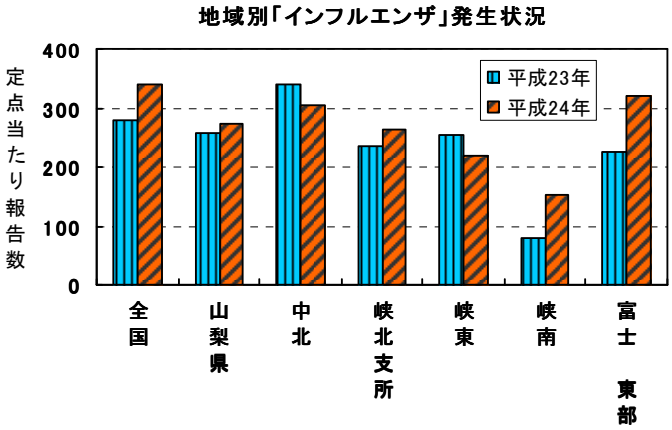
《週別発生状況》

第 3 週に定点当たり 19.23 となり、第 4 週から第 7 週に定点当たり 30.00 を超え、ピークは第 6 週（定点当たり 39.53）であった。その後減少し第 16 週前後に小さいピークが見られたが、第 18 週以降は定点当たり 1.00 以下となり流行は終息した。第 38 週から患者報告が始まり 49 週に定点当たりの報告数が 1.00 となり、2012/2013 シーズンの流行が始まった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（321.11）、次いで中北保健所管内（305.85）であった。最も少なかったのは前年と同じ峡南保健所管内（151.33）だった。



２－２　小児科定点から報告された感染症

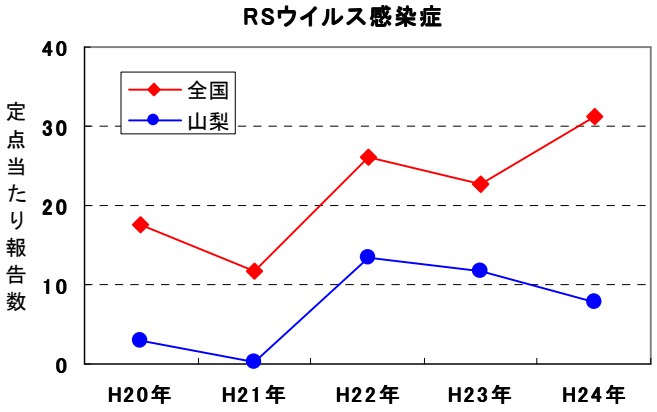
小児科定点は 24 で、県内全保健所管内にあり週報として報告される。

総報告数は 14,105 例で、前年（14,297 例）よりやや少なかった。前年と比較して報告数が増加した疾患は、Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎、感染性胃腸炎の 2 疾患であった。突発性発疹は前年並みであったが、他の 8 疾患（RS ウイルス感染症、咽頭結膜炎、水痘、手足口病、伝染性紅斑、百日咳、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎）は前年に比べ減少した。

○ ＲＳウイルス感染症

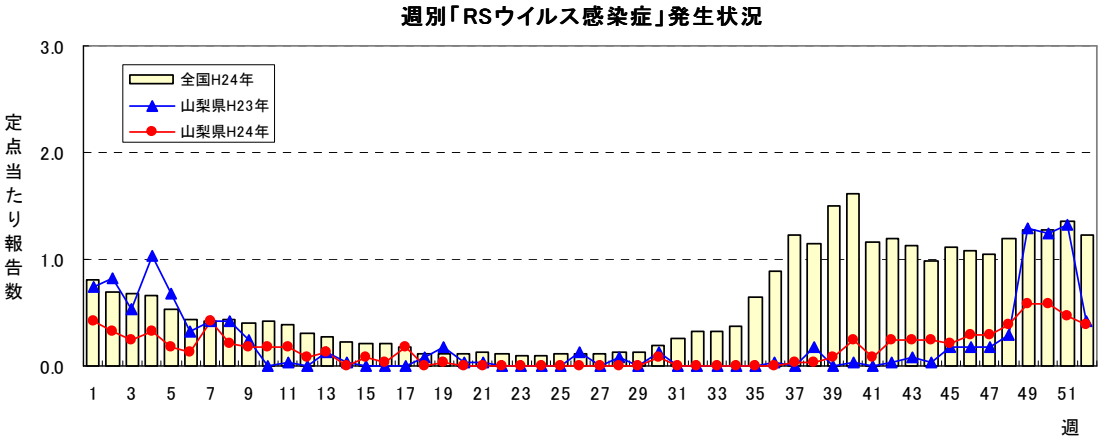
定点医療機関から 187 例（定点当たり報告数 7.79）の報告があり、前年（279 例）より減少した。

最近 5 年間の状況をみると、平成 22 年に増加がみられたがその後は減少が続いている。



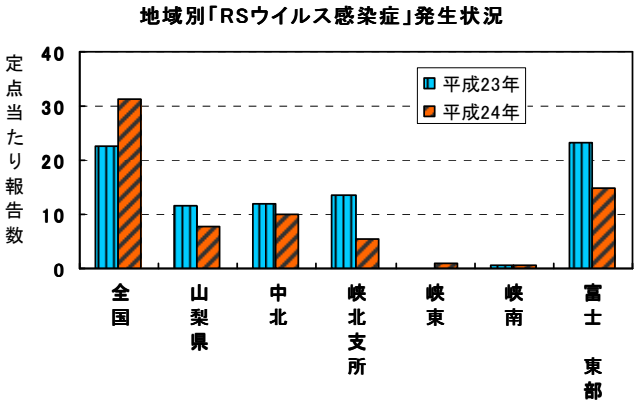
《週別発生状況》

第 49 週から第 51 週に冬季の小さいピークがみられたが、大きな流行はなかった。



《地域別発生状況》

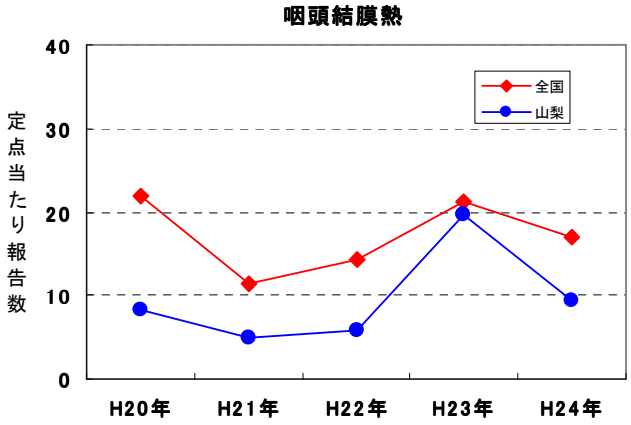
定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（15.00）、次いで中北管内（9.88）であった。



○ 咽頭結膜熱

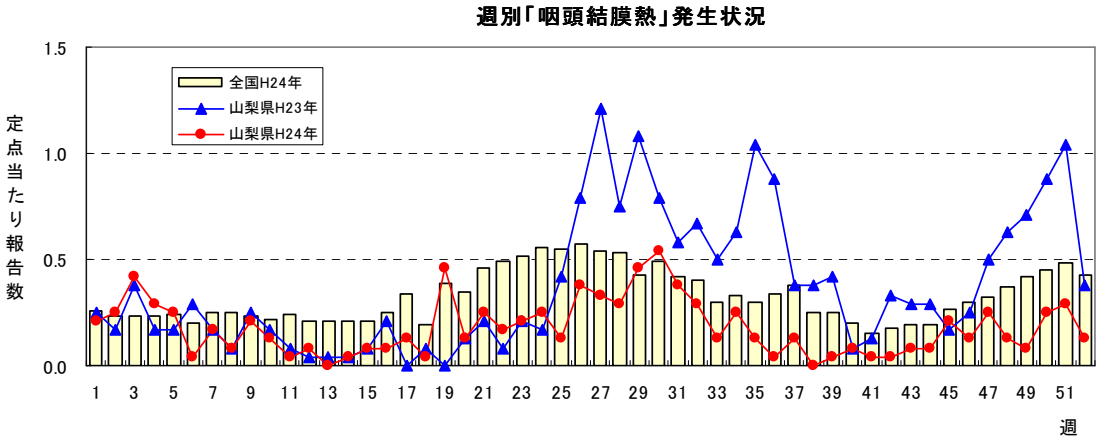
定点医療機関から 223 例（定点当たり報告数 9.29）の報告があり、前年（471 例）に比べ約半数であった。

最近 5 年間は、全国より少ない状況でほぼ同様に推移している。



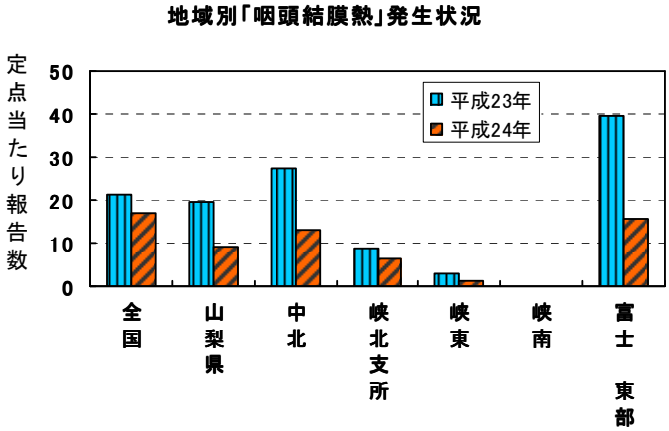
《週別発生状況》

最多報告は第 30 週で、夏季に報告が多かった。



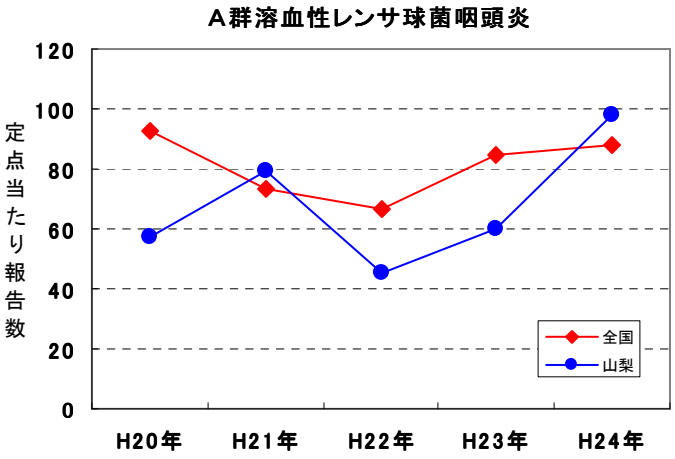
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（15.6）で、峡南保健所管内からの報告は前年に続いてなかった。報告のあったすべての地域で昨年より減少した。



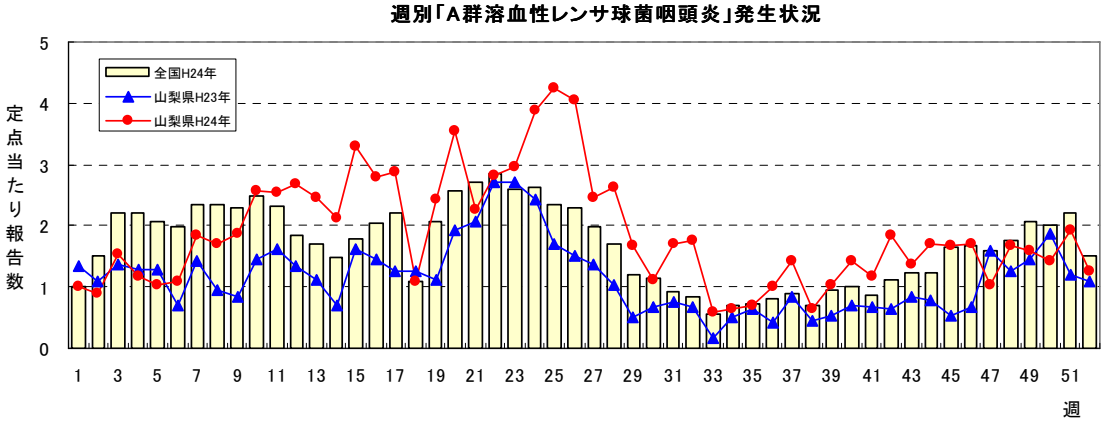
○ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

定点医療機関から 2,347 例（定点当たり報告数 97.79）の報告があり、前年（1,443 例）に比べ 1.6 倍の増加であった。定点当たりの報告数は全国の報告数を上回り、最近 5 年間では最も多い報告数であった。



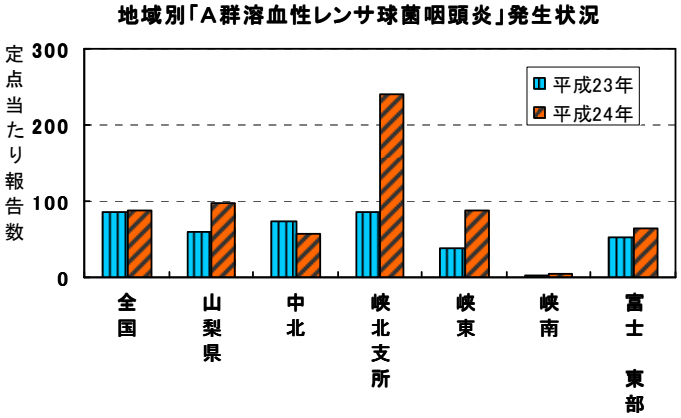
《週別発生状況》

春から秋にかけての定点当たりの報告数は全国を上回り、第 25・26 週は 4.00 を超えてピークとなった。



《地域別発生状況》

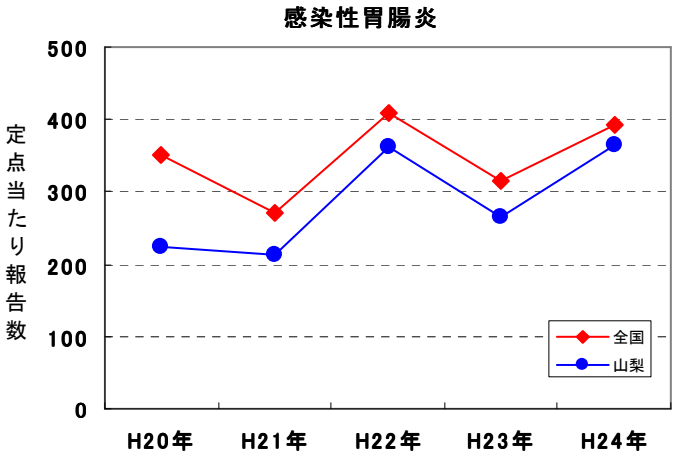
定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内（240.00）で、中北保健所管内を除く 4 地域で前年より増加した。



○ 感染性胃腸炎

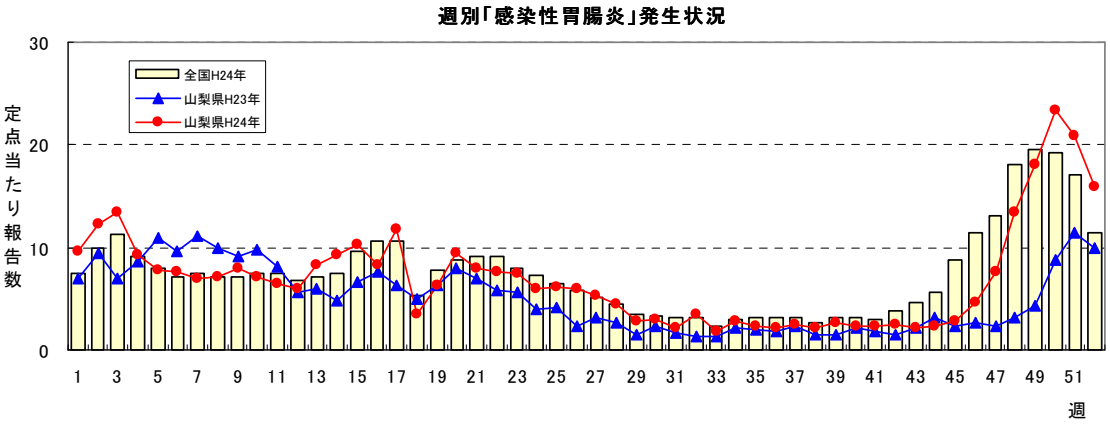
定点医療機関から 8,768 例（定点当たり報告数 365.33）の報告があり、前年（6,392 例）に比べ 1.4 倍の増加であった。

最近 5 年間は、全国より少ない状況でほぼ同様に推移している。



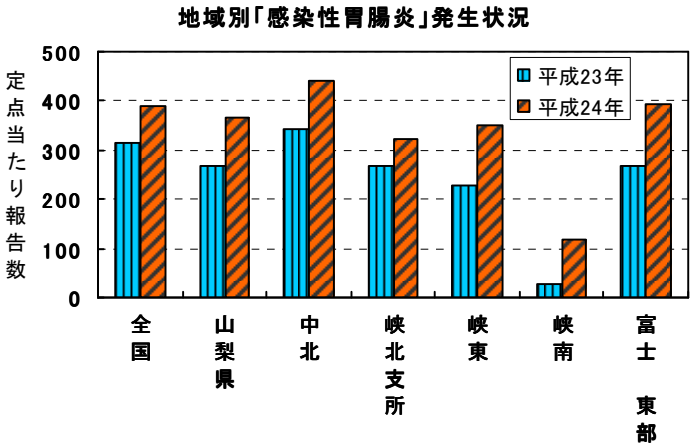
《週別発生状況》

第 50・51 週に 20.00 を超えてピークとなった。年間を通してほぼ全国と同様の発生状況を示した。



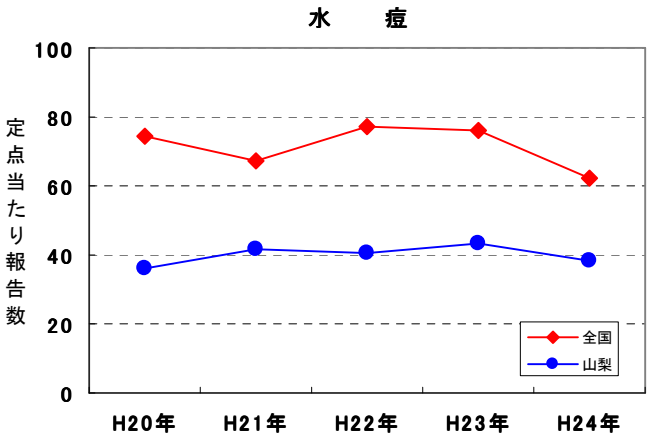
《地域別発生状況》

定点あたりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（442.25）で、すべての地域で前年より増加した。



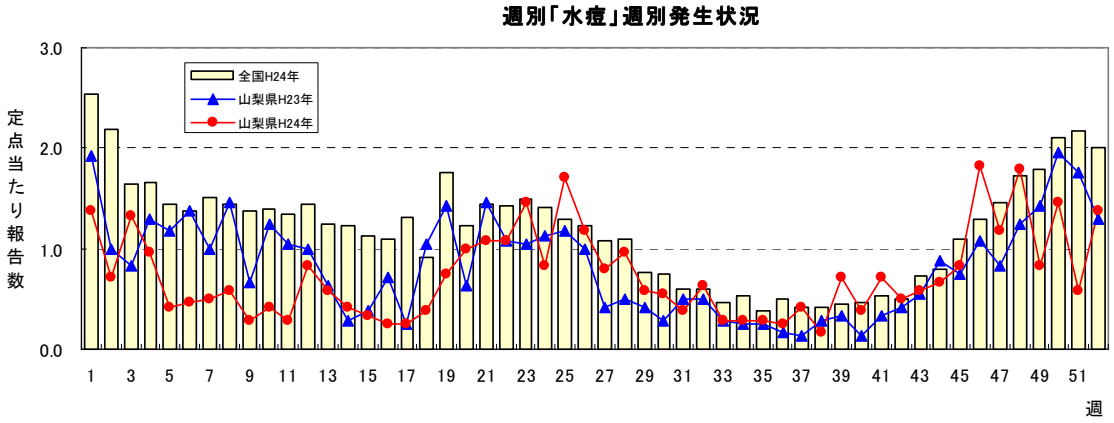
○ 水　痘

定点医療機関から 923 例（定点当たり報告数 38.46）の報告があり、前年（1,036 例）よりやや少なく、最近 5 年間の状況は横ばいである。



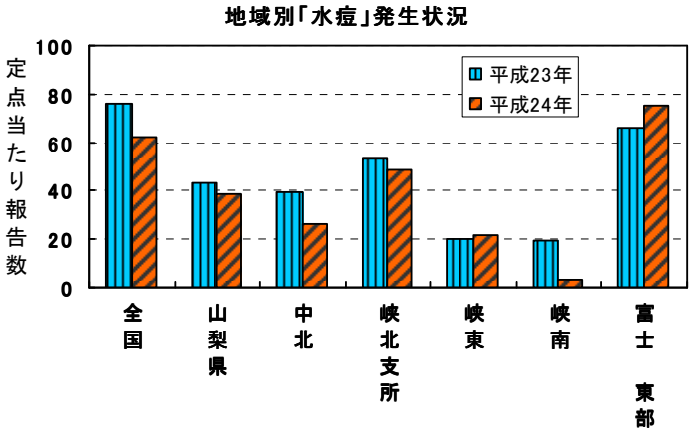
《週別発生状況》

最多報告は第 46 週（定点当たり 1.83）で、年間を通して全国と同様の発生状況を示した。



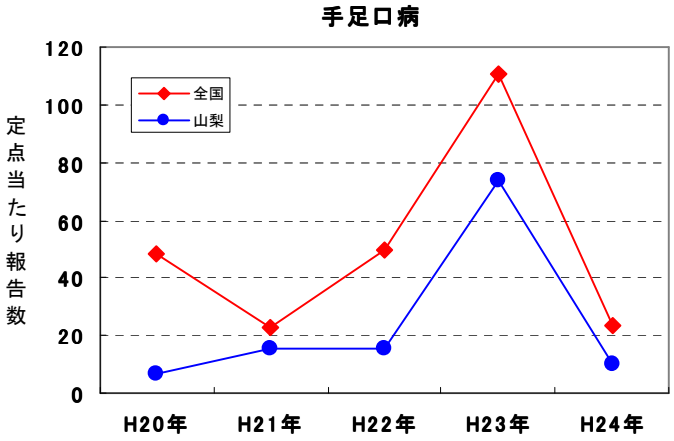
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（75.00）であった。



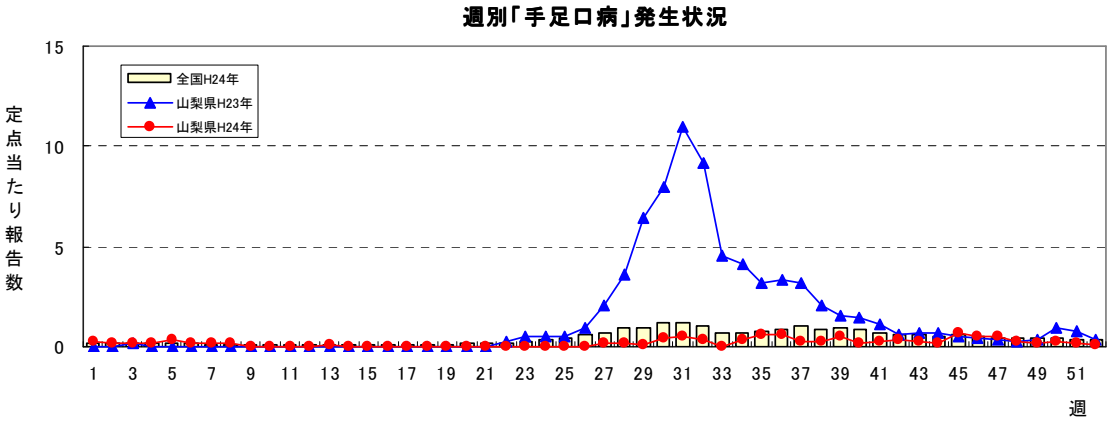
○ 手足口病

定点医療機関から 245 例（定点当たり報告数 10.21）の報告があり、前年（1,774 例）の 14%で、全国と同様に推移している。



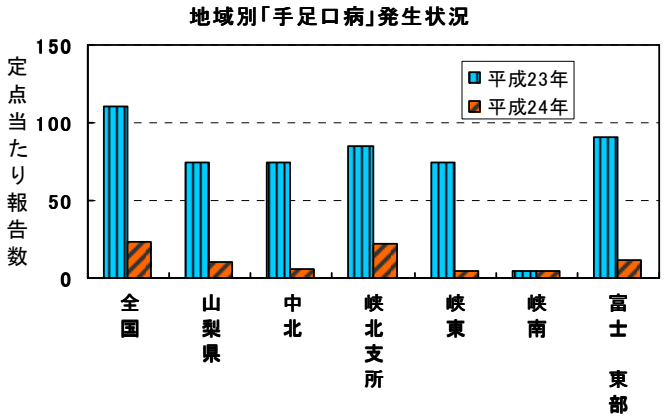
《週別発生状況》

年間を通じてピークは見られず、全国と同様の状況であった。



《地域別発生状況》

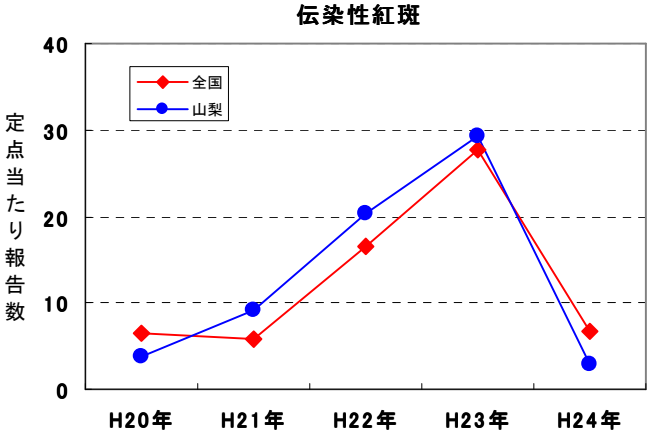
定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内(21.60)で、前年に比べすべての地域で減少した。



○ 伝染性紅斑

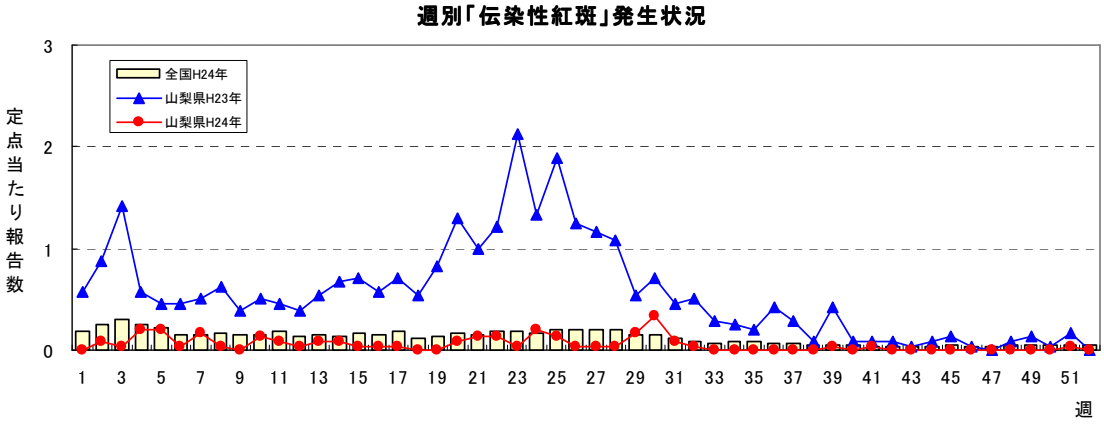
定点医療機関から 70 例（定点当たり報告数 2.92）の報告があり、前年（702 例）の 10%であった。

最近 5 年間の状況は、全国と同様に推移している。



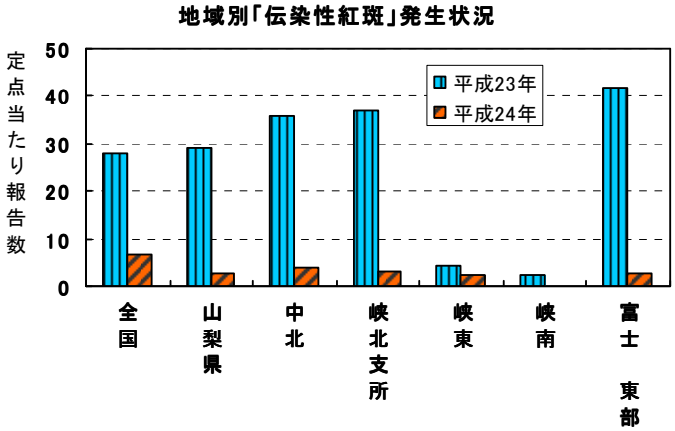
《週別発生状況》

年間を通じてピークは見られず、全国とほぼ同様の状況であった。



《地域別発生状況》

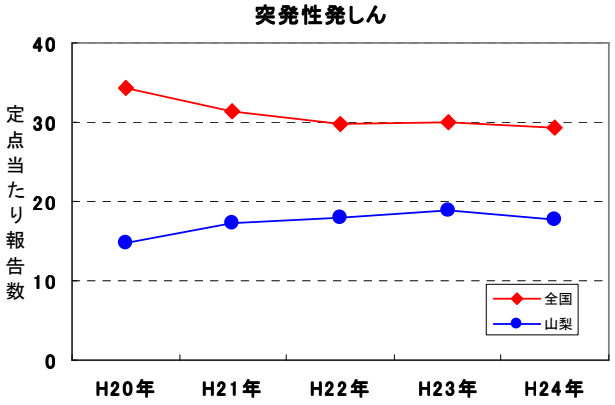
定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内(4.13)で、前年に比べすべての地域で減少した。



○ 突発性発疹

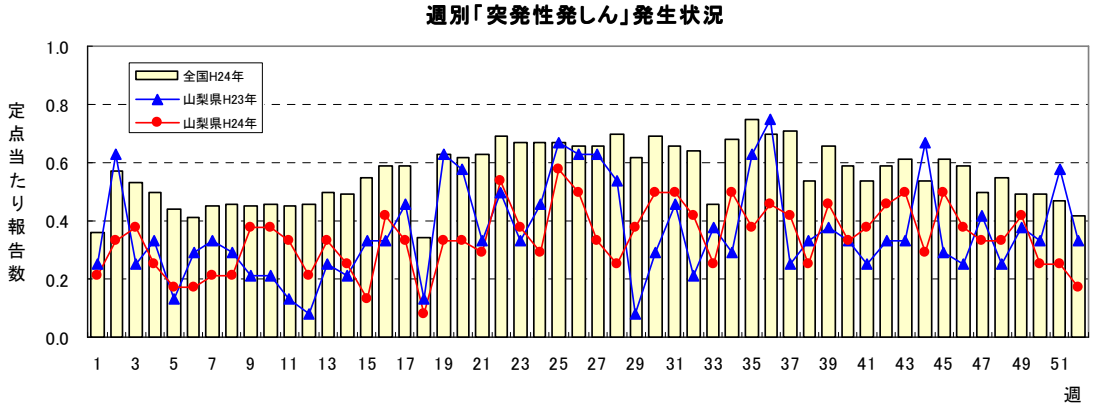
定点医療機関から 424 例（定点当たり報告数 17.67）の報告があり、前年（454 例）よりやや少なかった。

最近 5 年間の状況はほぼ横ばいである。



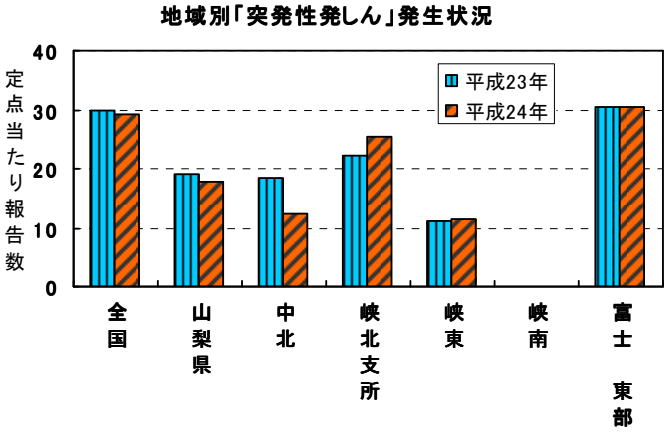
《週別発生状況》

年間を通して報告があるが、大きな流行はみられなかった。



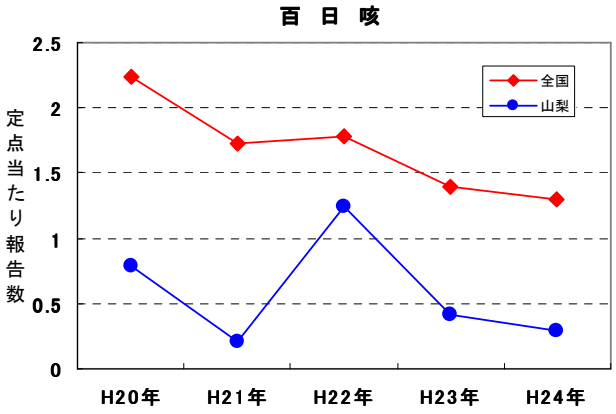
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（30.60）だった。前年に続いて、峡南保健所管内からの報告はなかった。



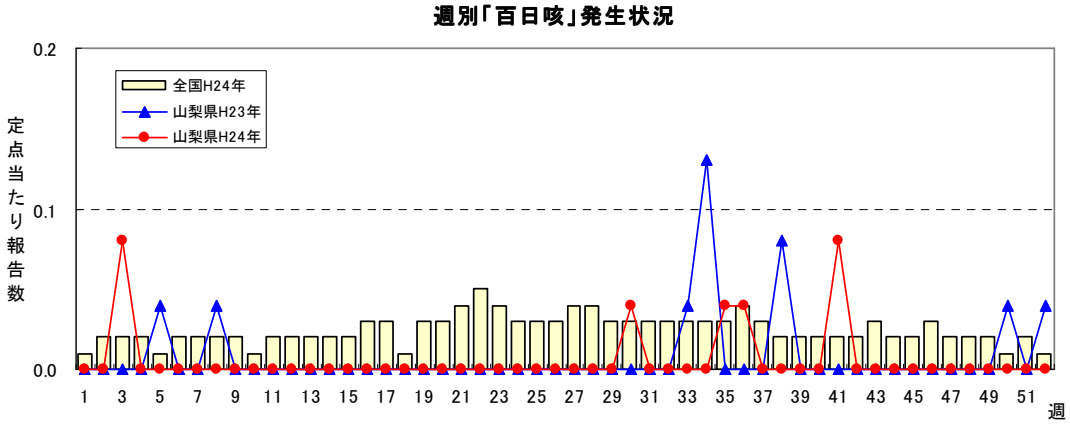
○ 百日咳

定点医療機関から 7 例（定点当たり報告数 0.29）の報告があり、前年（10 例）より減少した。



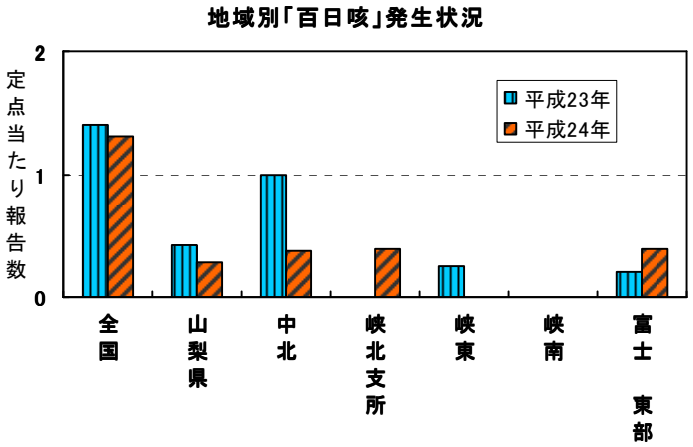
《週別発生状況》

年間を通じて散発的な報告がみられた。



《地域別発生状況》

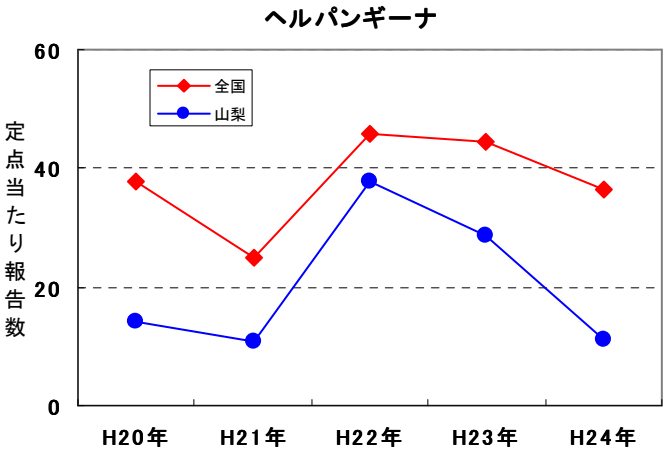
峡東保健所、峡南保健所管内からの報告はなかった。



○ ヘルパンギーナ

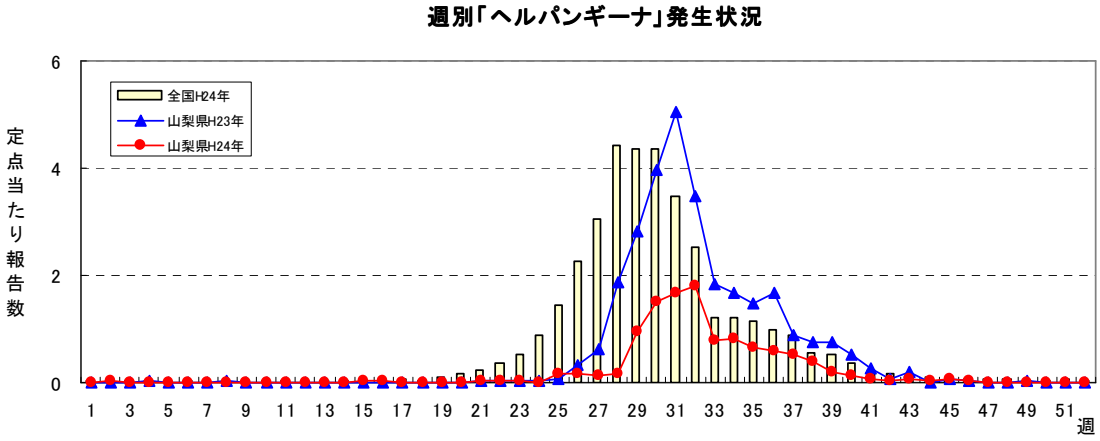
定点医療機関から 271 例（定点当たり報告数 11.29）の報告があり、前年（689 例）と比べて約 40%であった。

最近 5 年間をみると、全国の状況とほぼ同様の推移である。



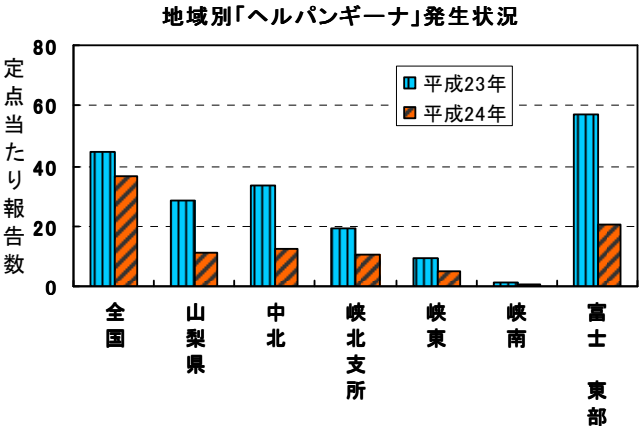
《週別発生状況》

第 29 週から報告数が増加し始め、第 34 週に流行のピークがみられたが、大きな流行はなかった。



《地域別発生状況》

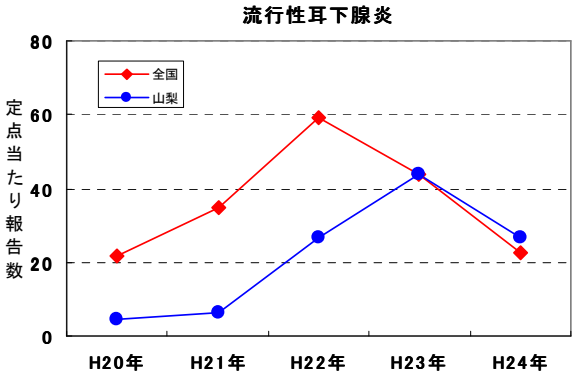
定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（20.20）だったが、すべての地域で前年より減少した。



○ 流行性耳下腺炎

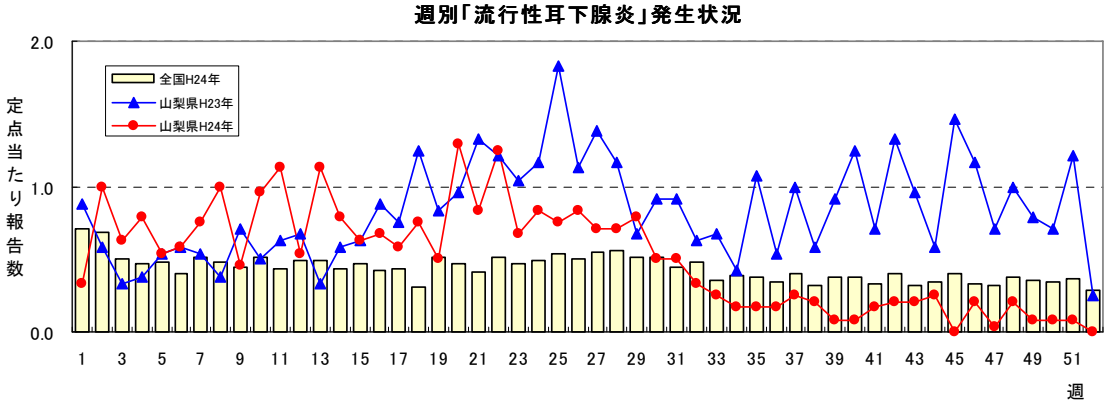
定点医療機関から 640 例（定点当たり報告数 26.67）の報告があり、前年（1,047 例）と比べて約 60%であった。

最近 5 年間の状況をみると、昨年までは増加傾向だったが、本年は減少した。



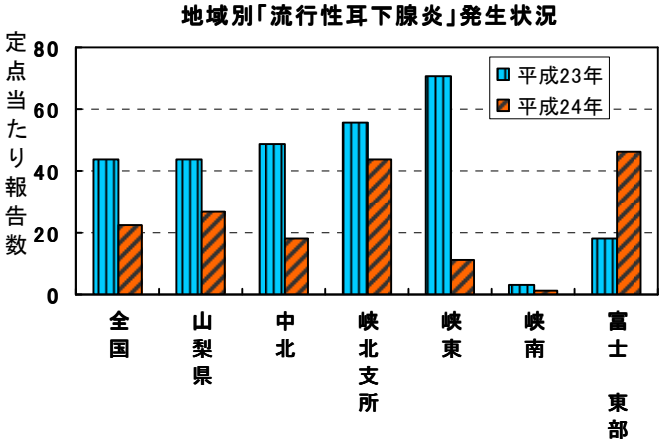
《週別発生状況》

年間を通して報告がみられたが、2～29 週までは全国を上回る報告数であった。最多報告は第 20 週（定点当たり 1.29）であった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（46.00）で、前年に比べ約 2 倍の報告数だった。他の地域はすべて前年より減少した。



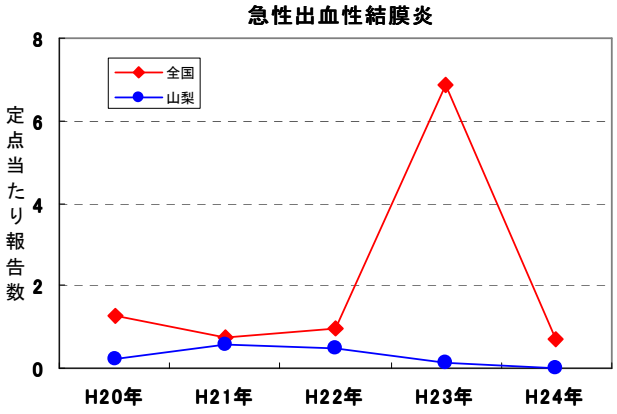
２－３　眼科定点から報告された感染症

眼科定点は、峡南保健所を除く 4 保健所管内に 9 定点あり、週報として報告される。

平成 24 年に報告された総数は 155 例で、急性出血性結膜炎 0 例、流行性角結膜炎 155 例であった。

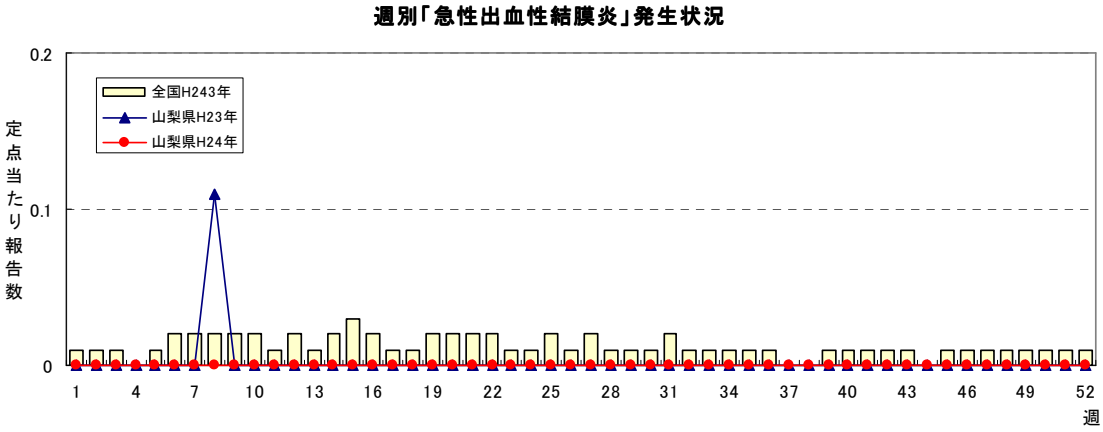
○ 急性出血性結膜炎

定点医療機関からの報告はなかった。



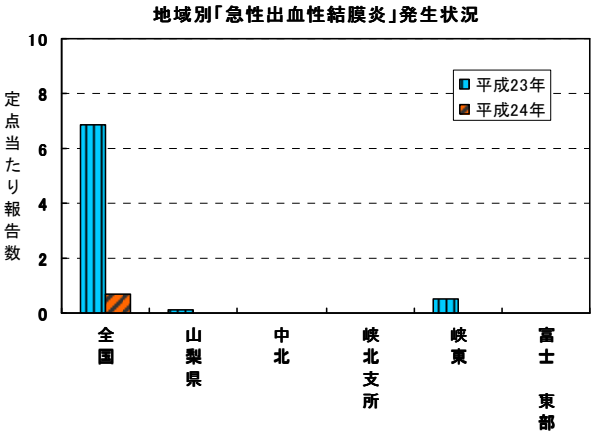
《週別発生状況》

年間を通して報告がなかった。



《地域別発生状況》

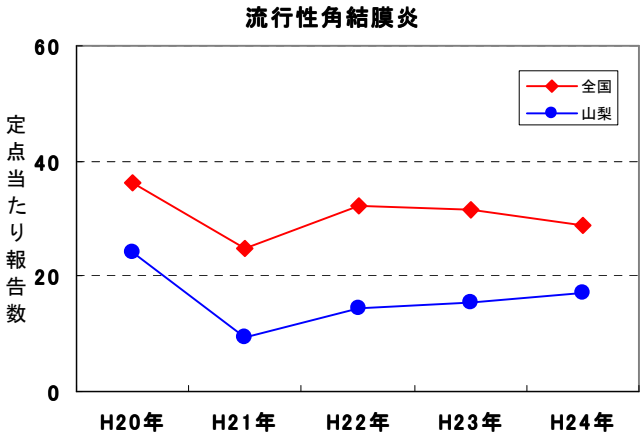
報告はなかった。



○ 流行性角結膜炎

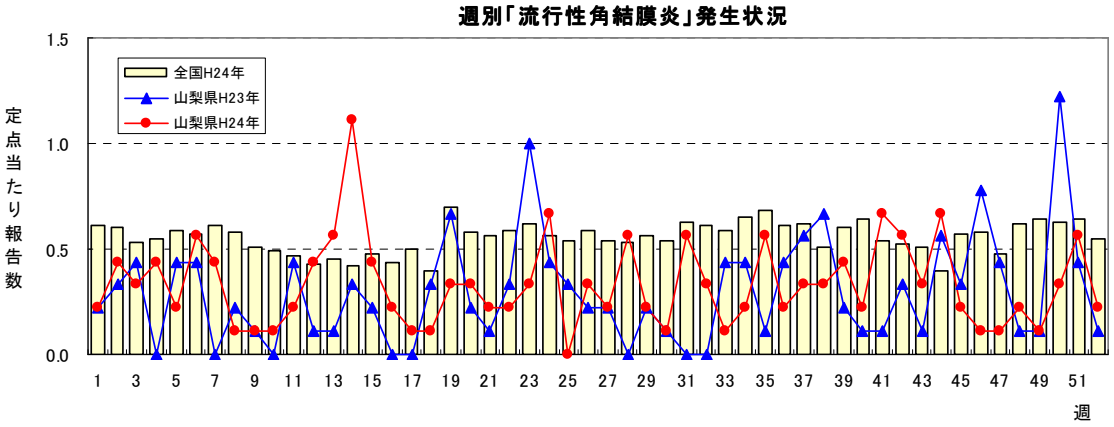
定点医療機関から 155 例（定点当たり報告数 17.22）の報告があり、前年（138 例）よりやや増加した。

最近 5 年間の状況は、平成 21 年に減少したがその後は微増傾向である。



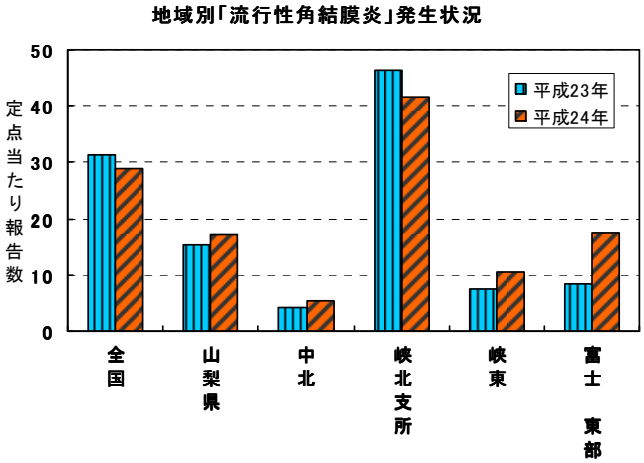
《週別発生状況》

年間を通して報告があり、最多報告は第 14 週であった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは昨年に続いて、峡北支所管内（41.50）で、定点医療機関がある全ての地域から報告されている。



２－４　性感染症定点から報告された感染症

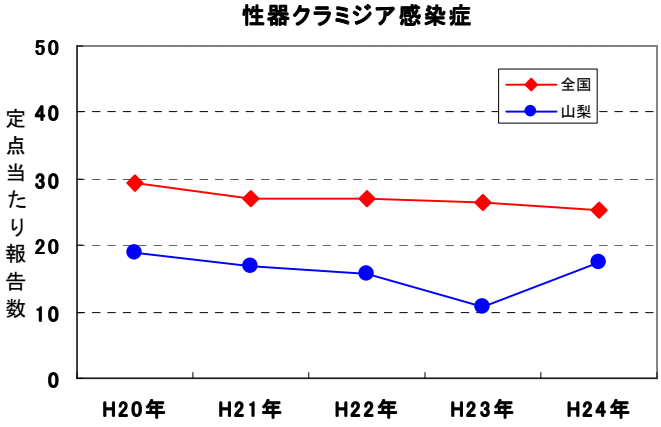
性感染症定点は､峡南保健所を除く 4 保健所管内に 9 定点あり月報として報告される。

平成 24 年に報告された総数は 252 例(昨年 205 例)、定点当たりの報告数は 28.00 で前年の約 1.2 倍であった。

○ 性器クラミジア感染症

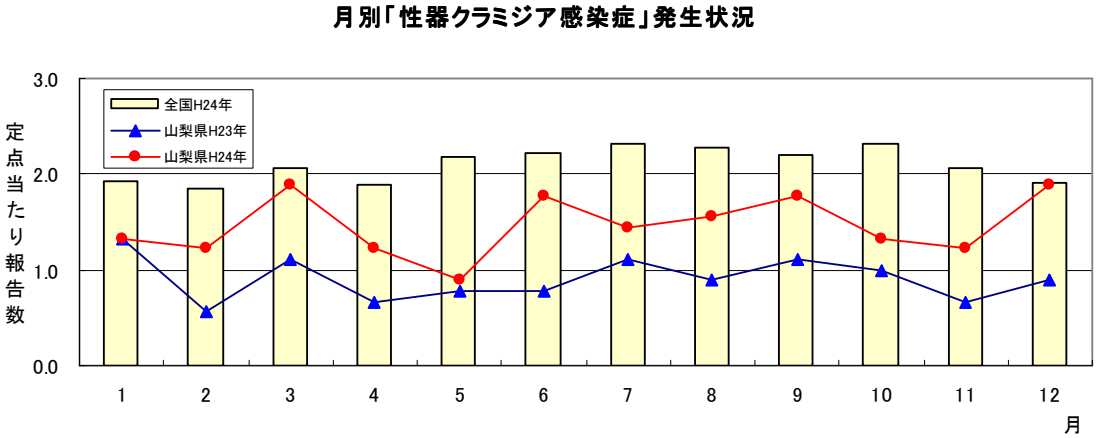
定点医療機関から 158 例（定点当たり報告数 17.56）の報告があり、前年（98 例）の 1.6 倍の報告であった。

最近 5 年間の状況は減少傾向が続いていたが、本年増加に転じた。



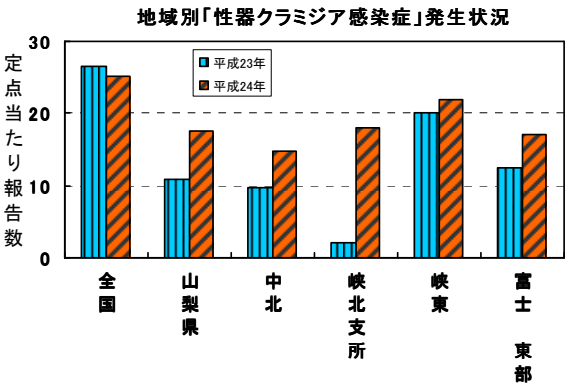
《月別報告数》

全国より少ない状況で、毎月報告があった。



《域別発生状況》

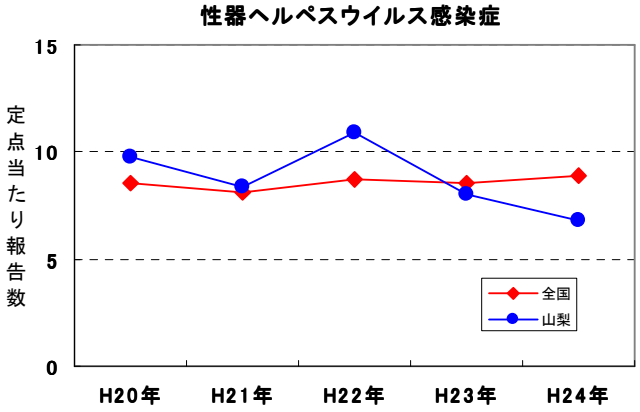
定点当たりの報告数が最も多かったのは峡東保健所管内（22.00）で、定点医療機関がある全ての地域で増加した。



○ 性器ヘルペスウイルス感染症

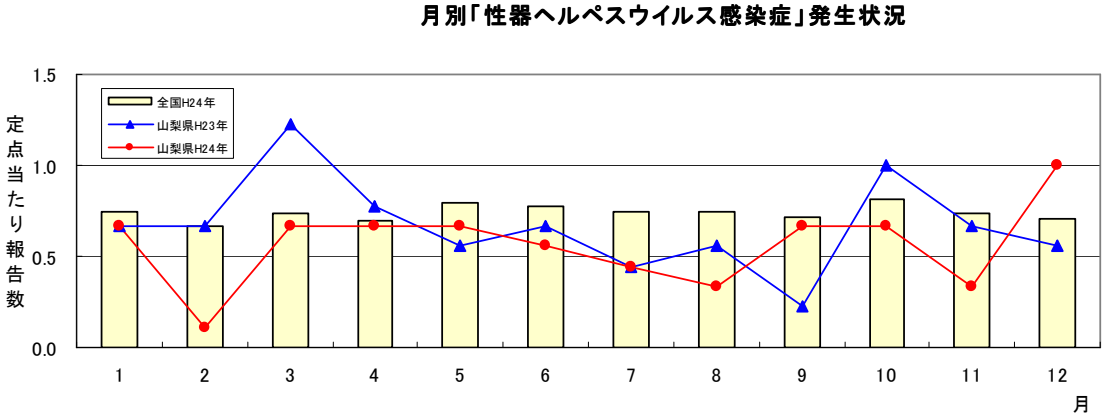
定点医療機関から 61 例（定点当たり報告数 6.78）の報告があり、前年より 11 例少なかった。

昨年に続いて減少している。



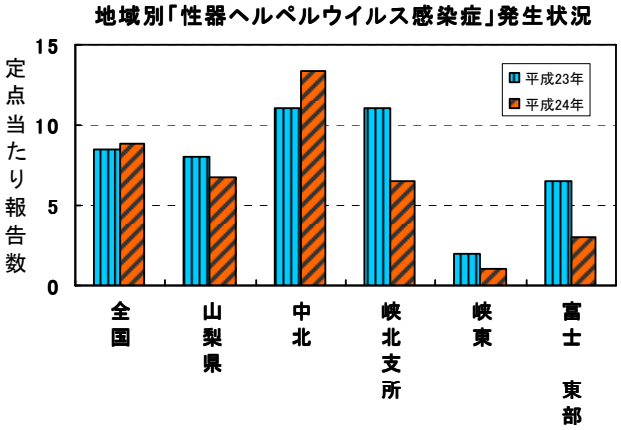
《月別発生状況》

毎月報告があった。



《地域別発生状況》

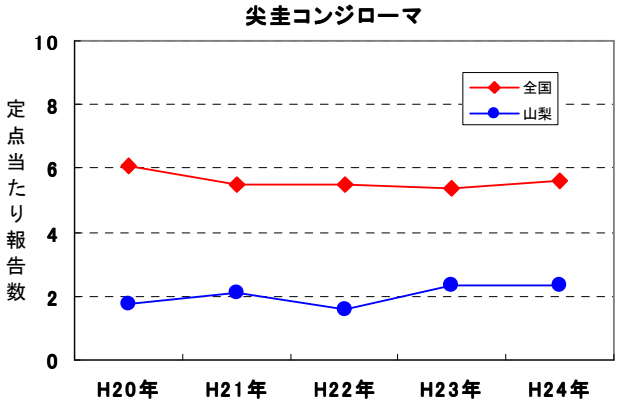
定点当たりの報告数が多かったのは中北保健所管内（13.33）で、定点医療機関があるすべての地域から報告があった。



○ 尖圭コンジローマ

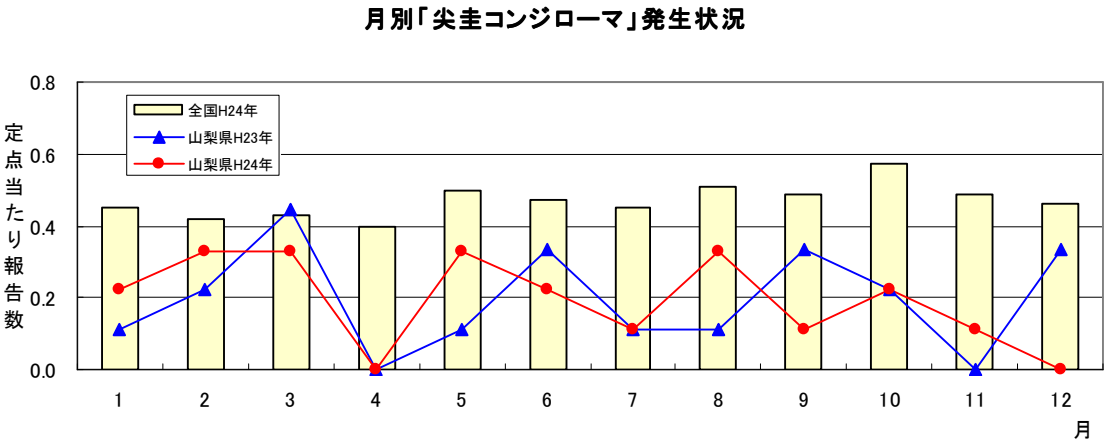
定点医療機関から 21 例(定点当たり報告数 2.33) の報告があり、前年と同じであった。

最近 5 年間の状況をみると、全国同様に横ばいである。



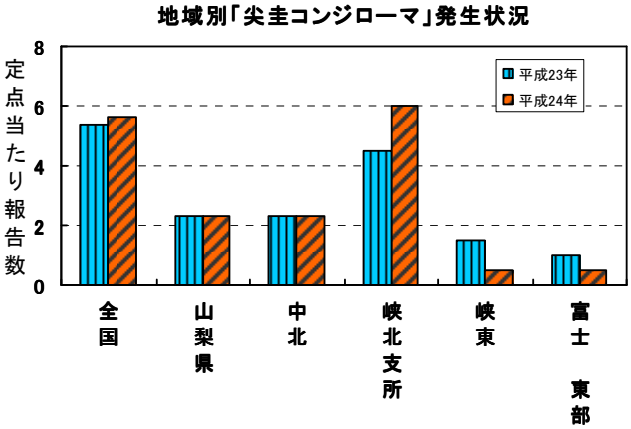
《月別発生状況》

全国より少ない状況で、毎月報告があった。



《地域別発生状況》

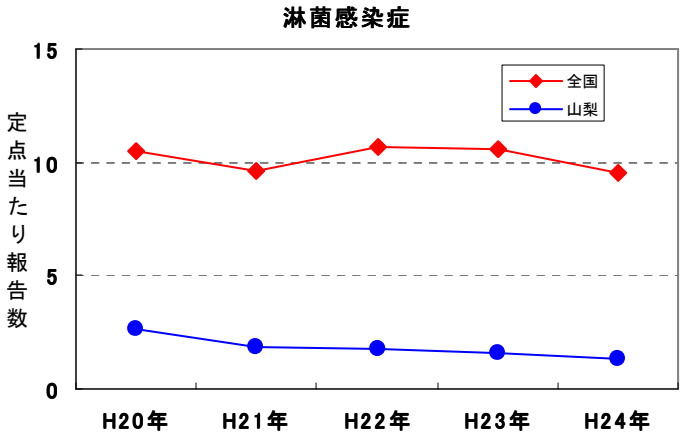
定点当たりの報告数がもっとも多かったのは峡北支所管内（6.00）で定点医療機関があるすべての地域から報告があった。



○ 淋菌感染症

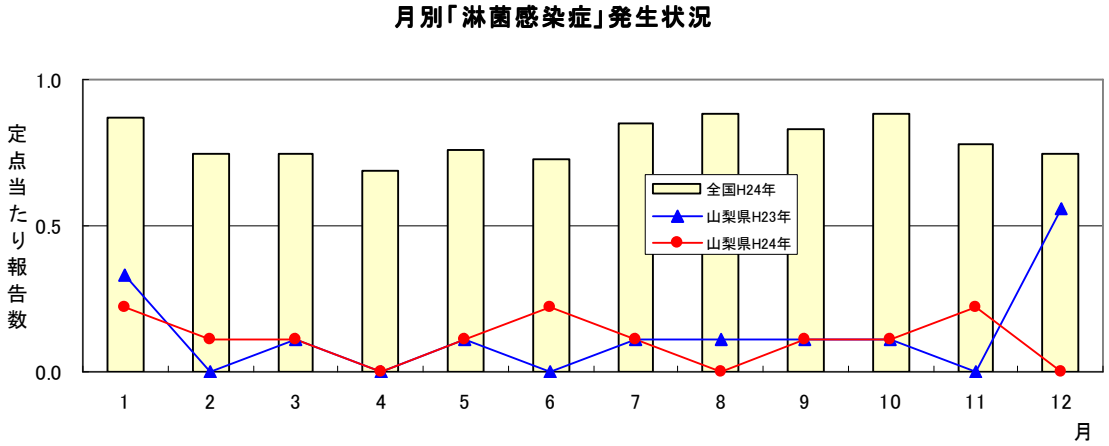
定点医療機関から 12 例（定点当たり報告数 1.33）の報告があり、前年より 2 例少なかった。

最近 5 年間は緩やかな減少傾向が続いている。



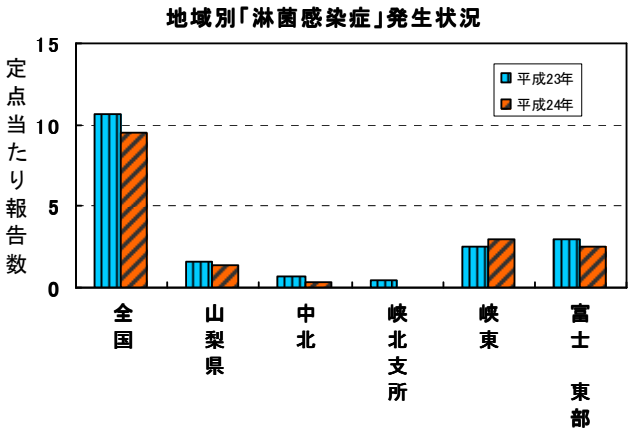
《月別発生状況》

全国より少ない状況で、ほぼ毎月報告があった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは峡東保健所管内（3.00）で、峡北支所管内からの報告はなかった。



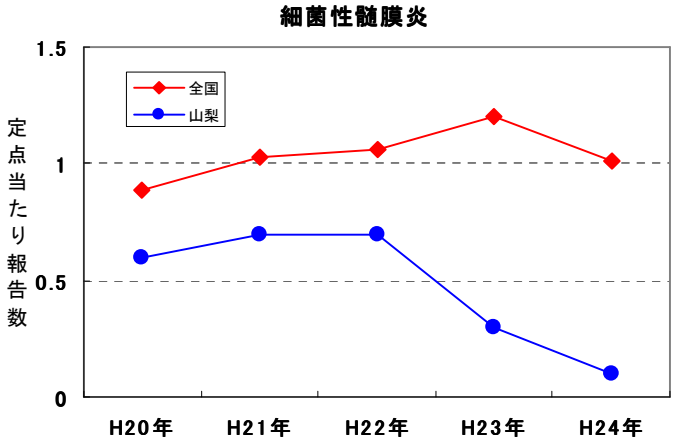
２－５　基幹定点から報告された感染症

基幹定点は県内全保健所管内にあり 10 定点である。細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、マイコプラズマ肺炎、クラミジア肺炎（オウム病は除く）は週報として、メシチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症は月報として報告される。

報告数が多かったのは、マイコプラズマ肺炎 256 例、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 143 例であった。クラミジア肺炎（オウム病は除く）は 41 例であるが、近年の定点当たりの報告数は全国平均を上回っている。平成 23 年 2 月に追加された薬剤耐性アシネトバクター感染症は昨年に続いて報告はなかった。

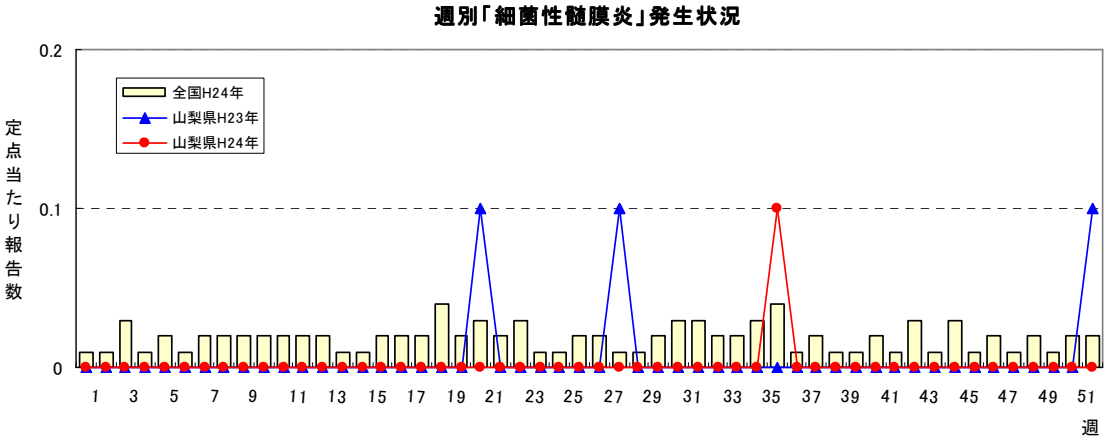
○ 細菌性髄膜炎

定点医療機関から１例（定点当たり報告数 0.10）の報告があった。



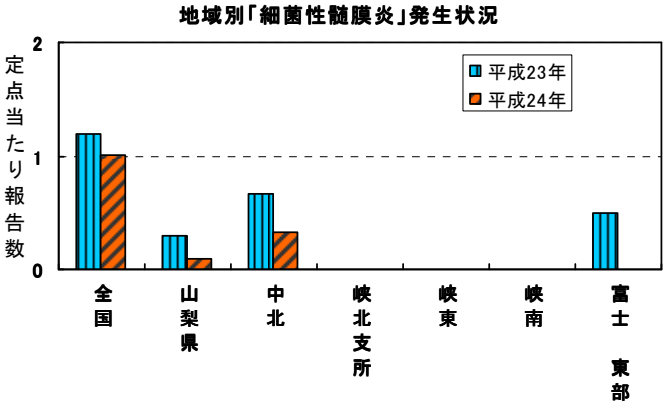
《週別発生状況》

第 35 週に１例の報告があった。



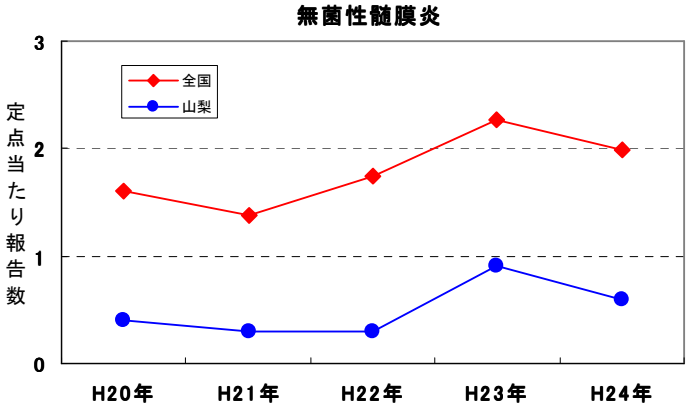
《地域別発生状況》

報告例の１例は中北保健所管内であった。



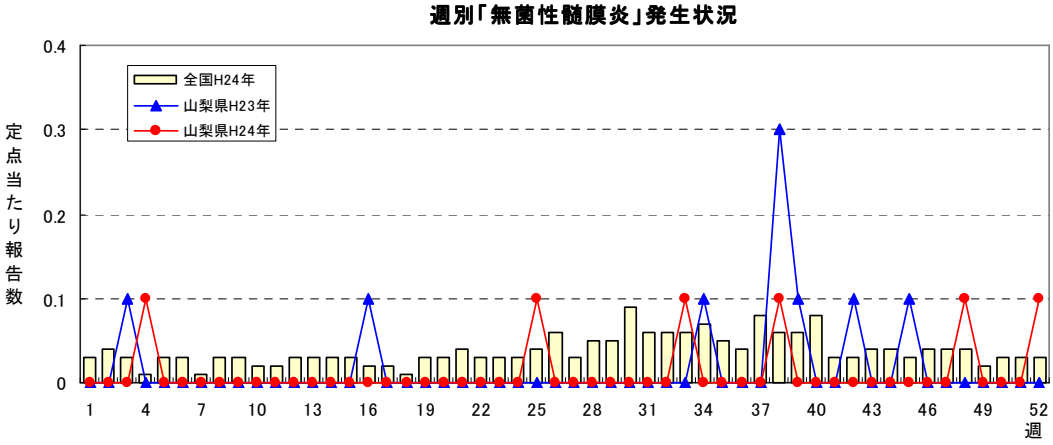
○ 無菌性髄膜炎

定点医療機関から 6 例（定点当たり報告数 0.60）の報告があった。全国の状況と同じ動向を示している。



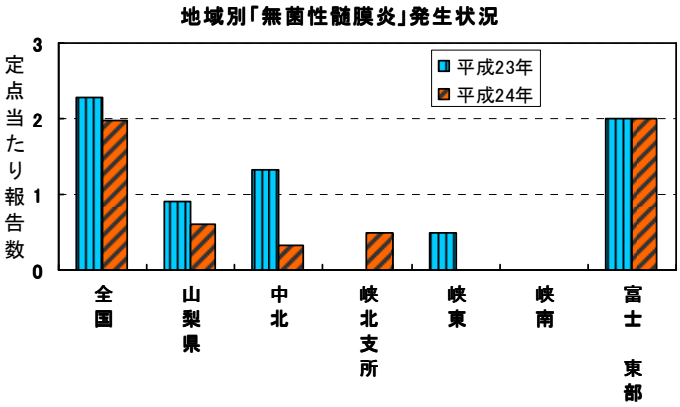
《週別発生状況》

散発的（第 4 週、25 週、33 週、38 週、48 週、52 週）な報告があった。



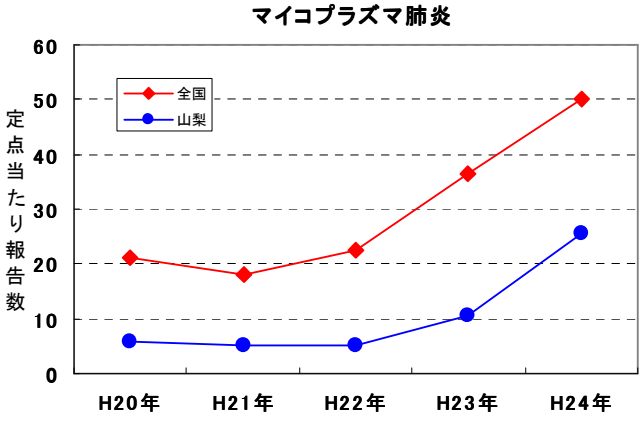
《地域別発生状況》

報告のあった 6 例は、富士・東部保健所管内 4 例（2.00）、中北保健所管内 1 例(0.33)、峡北支所管内 1 例（0.50）だった。



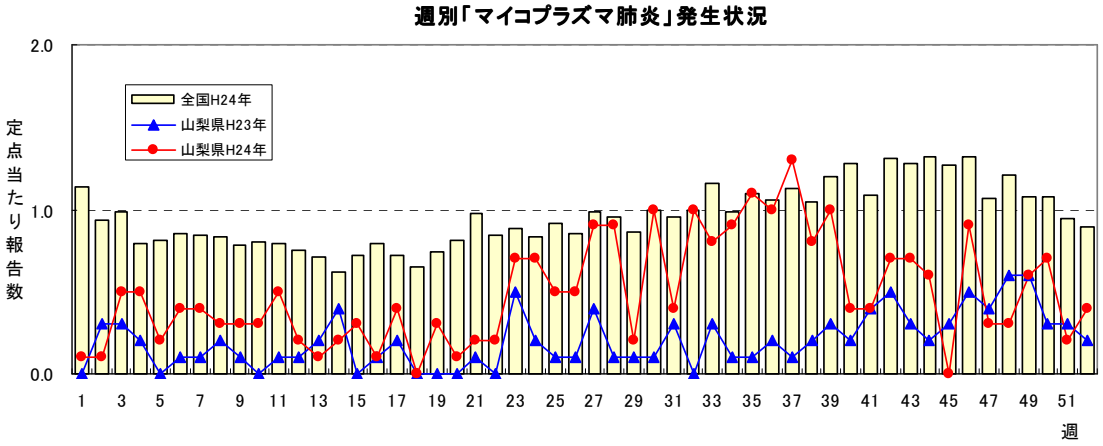
○ マイコプラズマ肺炎

定点医療機関から 256 例（定点当たり報告数 25.60）の報告があり、H20 年以降最多報告数であった。全国の状況と同じ動向を示している。



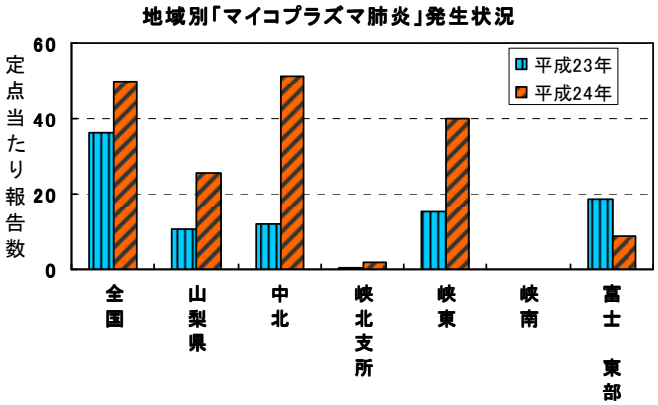
《週別発生状況》

年間を通して報告があり、特に第 30～39 週の報告数が多かった。。



《地域別発生状況》

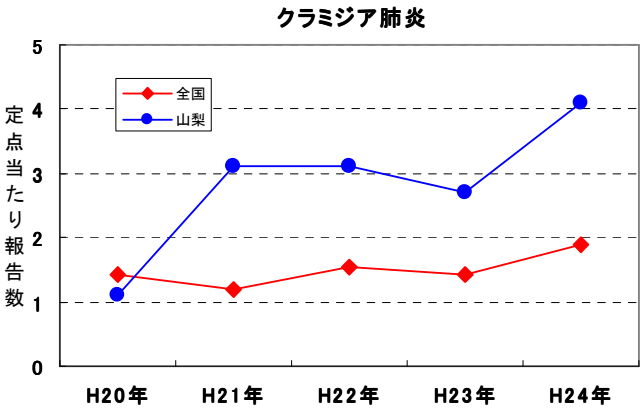
定点当たりの報告数がもっとも多かったのは中北保健所管内（6.00）で、峡南保健所管内を除くすべての地域から報告があった。



○ クラミジア肺炎（オウム病を除く）

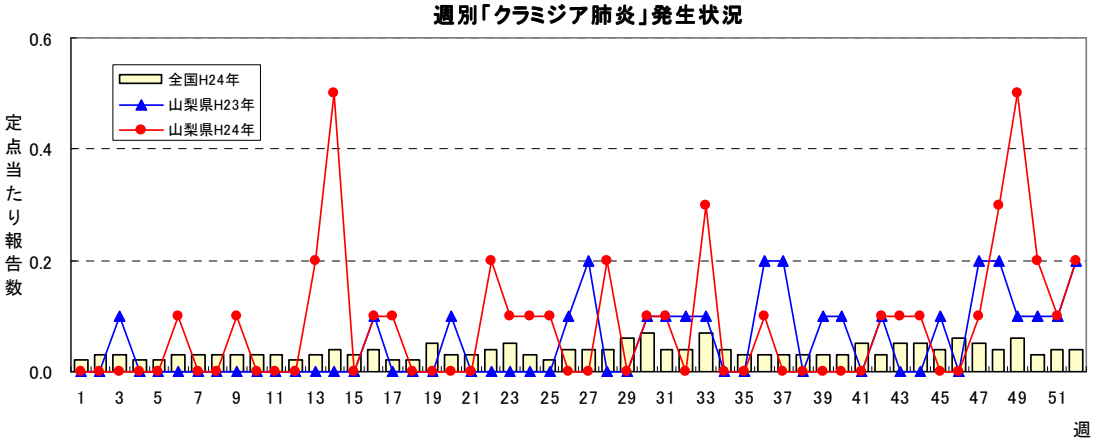
定点医療機関から 41 例（定点当たり報告数 4.10）の報告があり、前年（27 例）の 1.5 倍の報告数であった。

最近 5 年間では、平成 21 年以降定点当たりの報告数が全国を上回っている状況である。



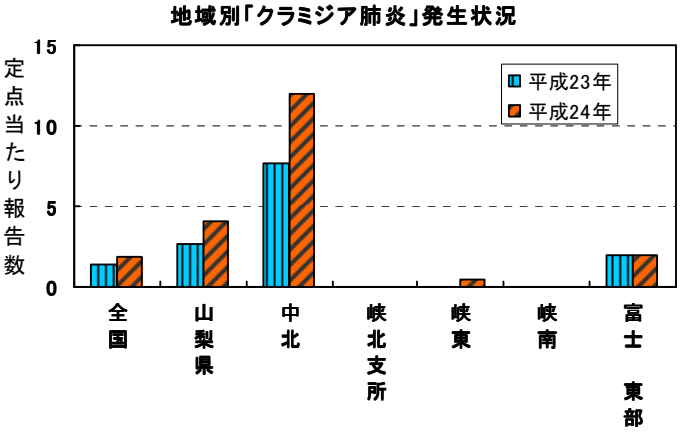
《週別発生状況》

年間を通して報告があった。



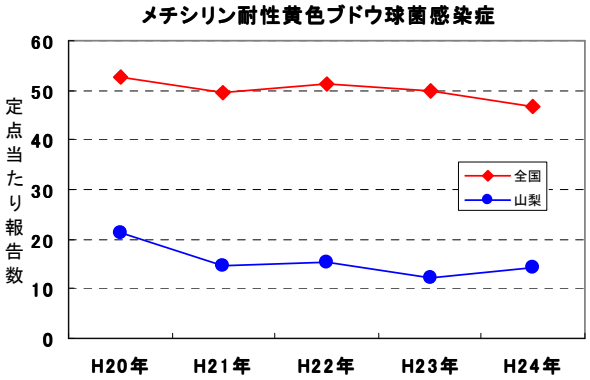
《地域別発生状況》

中北保健所管内 36 例（12.00）、富士・東部保健所管内 4 名（2.00）、峡東保健所管内 1 名（0.50）で、他の 2 地域からの報告はなかった。



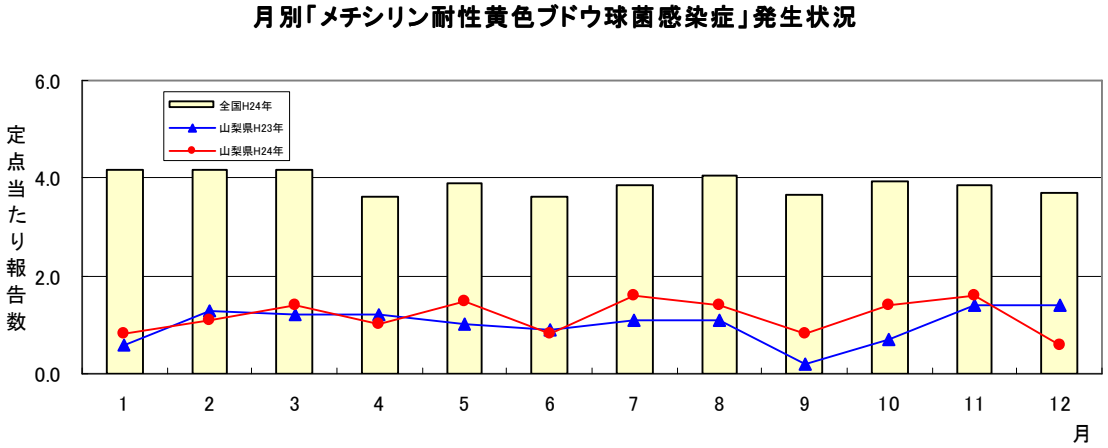
○ メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

定点医療機関から 143 例（定点当たり報告数 14.30）の報告があり、前年に比べて 22 例増加した。近年減少傾向にあったがわずかではあるが増加に転じた。



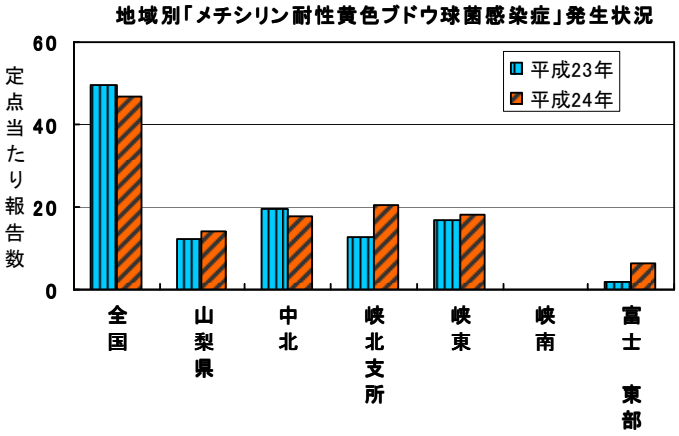
《月別発生状況》

全国より少ない状況ではあるが、毎月報告があった。



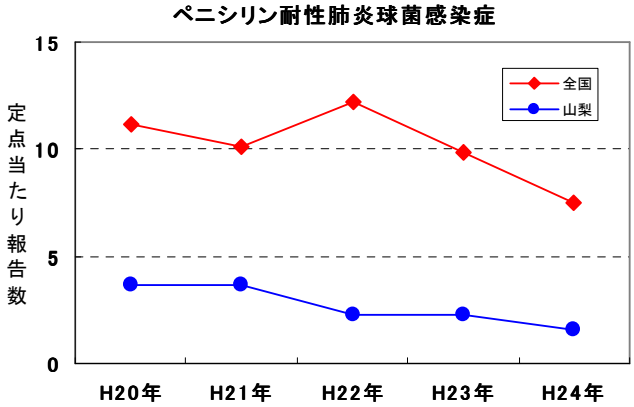
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内（20.50）で、峡南保健所管内を除くすべての地域から報告があった。



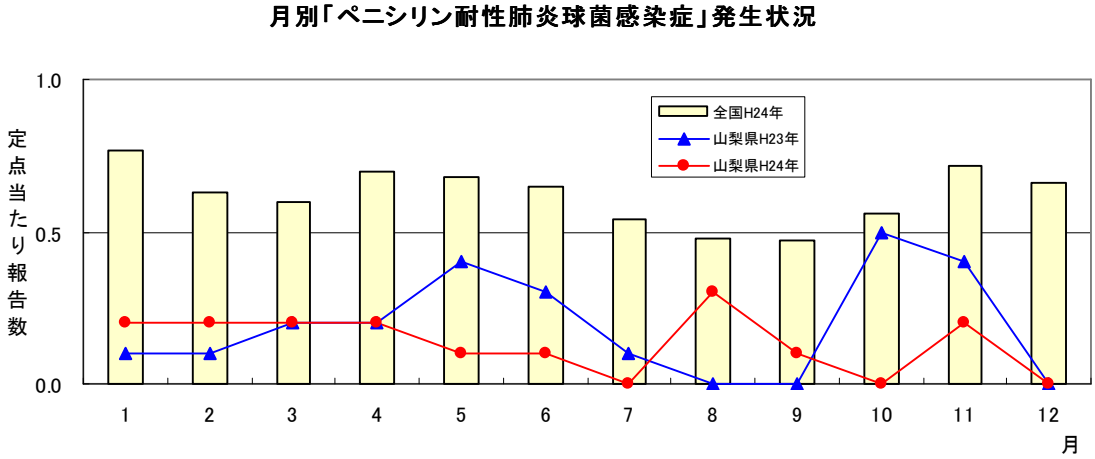
○ ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

定点医療機関から 16 例（定点当たり報告数 1.60）の報告があり、昨年より 7 例少なかった。最近 5 年間は減少傾向である。



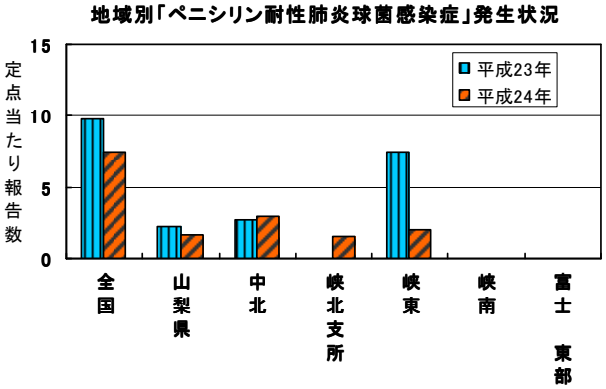
《月別発生状況》

7 月、10 月、12 月を除いて毎月報告があった。



《地域別発生状況》

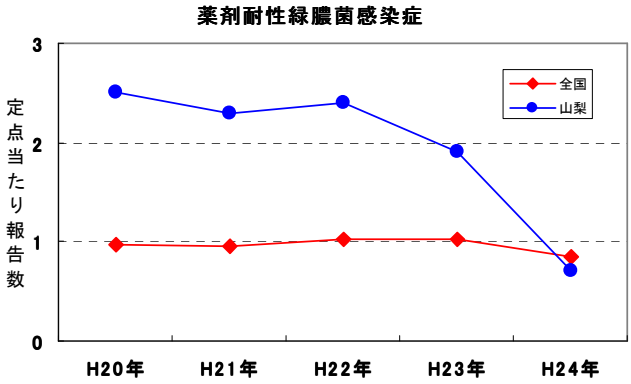
報告があった地域は、中北保健所管内 9 例（3.00）、峡東保健所管内 4 例（2.00）、峡北支所管内 3 例（1.50）で、他の 2 地域からの報告はなかった。



○ 薬剤耐性緑膿菌感染症

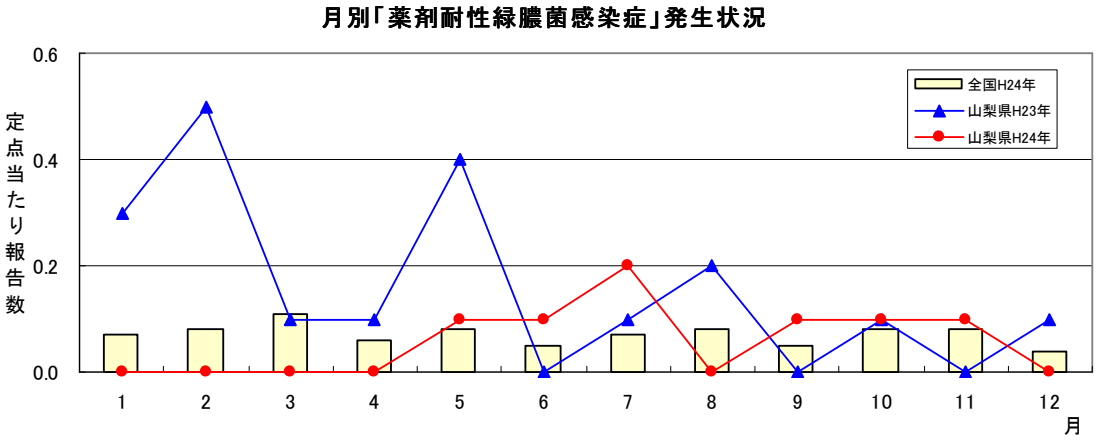
定点医療機関から前年より 12 例少ない、7 例（定点当たり報告数 0.70）の報告があった。

最近 5 年間の定点当たりの報告数は常に全国を上回っていたが、本年は全国（定点当たり報告数 0.85）を下回った。



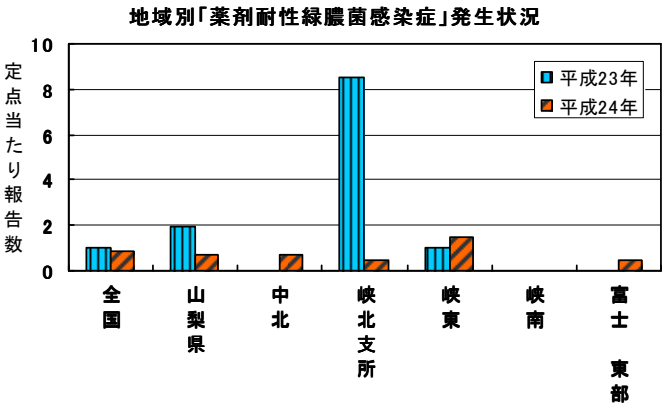
《月別発生状況》

報告があった月は 5・6・7 月、9・10・11 月だった。



《地域別発生状況》

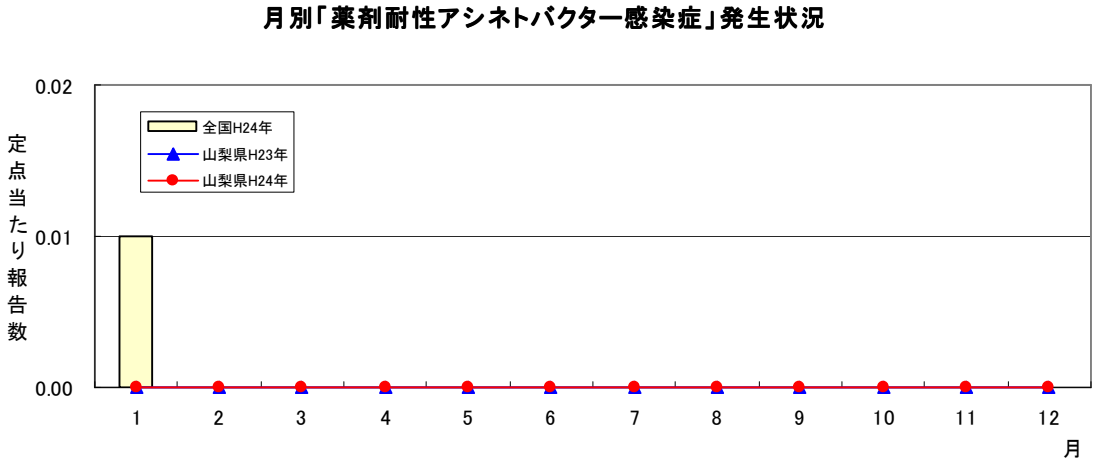
峡南保健所管内を除くすべての地域から報告があった。



○　薬剤耐性アシネトバクター感染症

山梨県内の報告はなかった。

《月別発生状況》



《地域別発生状況》

なし

Ⅲ　病原微生物検出状況

1　ウイルス検出状況

県内 19 箇所の病原体定点及び集団発生事例において採取された 1,252 検体についてＰＣＲ法と細胞分離法により、641 検体（51.2%）からウイルスを検出した。

ノロウイルスが 357 件と 55.7%を占め、次いでインフルエンザウイルスが 224 件（34.9%）であった。他にコクサッキーウイルス 20 件（3.1%）、A 群ロタウイルス 10 件（1.6%）、サポウイルス 8 件（1.2%）、アデノウイルス 5 件（0.8%）、麻疹ウイルス、風疹ウイルスが 4 件（0.6%）、ヒトヘルペスウイルス、エコーウイルスが 3 件（0.5%）、エンテロウイルス、アストロウイルス、アイチウイルスが 1 件（各 0.2%）検出された。

インフルエンザウイルスの型別検出状況は、A(H3)香港型が 178 件（79.5%）、B 型が 46 件（20.5%）であった。患者報告数が多かった第 3～10 週（1 月中旬～3 月上旬）に検出されたウイルスはA(H3)香港型が多かったことから、この型が流行の原因と思われた。

胃腸炎患者（病原体定点及び集団発生事例）から検出されたウイルスは、ノロウイルスＧⅡが 327 件、ノロウイルスＧⅠが 30 件、Ａ群ロタウイルスが 10 件、サポウイルス 8 件、アストロウイルス、アイチウイルス、型別不明のアデノウイルスがそれぞれ 1 件で夏季をのぞいて、ほぼ年間を通してウイルスが検出された。

平成 24 年 月別ウイルス検出状況

			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
検体数			247	68	116	82	64	35	141	33	47	8	10	401	1252
検出ウイルス	インフルエンザウイルス*	A(H3)香港型	106	14	6	4	1				11			36	178
		B型	5	9	22	10									46
	麻疹ウイルス	D8型	2												2
		A型			1										1
		D9型												1	1
	風疹ウイルス							1	1	1		1			4
	ヒトヘルペスウイルス	6型							1					1	2
		7型		1											1
	エンテロウイルス	71型										1			1
	コクサッキーウイルス	A16型											1	1	2
		A9型			1			2	15						18
	エコーウイルス	7型						1	1	1					3
	アデノウイルス	2型							1			1			2
		5型						1							1
		型別不明							1			1			2
	ノロウイルス*	ＧⅠ	1		9	6		1						13	30
		ＧⅡ	53	25	22	11	15				1		4	196	327
	ロタウイルス*	A群			3	7									10
	サポウイルス*				2	2	4								8
	アストロウイルス*							1							1
	アイチウイルス*					1									1
	計		167	49	66	41	20	7	20	2	12	4	5	248	641

*集団発生を含む

平成 24 年 疾患別ウイルス検出状況

疾　病	検 出 病 原 体	検出数
インフルエンザ様	インフルエンザウイルスA（H3）香港型	178
	インフルエンザウイルスB型	46
発疹	麻疹ウイルスA型	1
	麻疹ウイルスD8型	2
	麻疹ウイルスD9型	1
	風疹ウイルス	4
	ヒトヘルペスウイルス6型	2
	ヒトヘルペスウイルス7型	1
	アデノウイルス2型	1
手足口病	エンテロウイルス71型	1
	コクサッキーウイルスA16型	2
咽頭炎	コクサッキーウイルスA9型	18
	エコーウイルス7型	3
	アデノウイルス2型	1
	アデノウイルス5型	1
	アデノウイルス型別不明	1
胃腸炎	ノロウイルスGⅠ	30
	ノロウイルスGⅡ	327
	A群ロタウイルス	10
	サポウイルス	8
	アストロウイルス	1
	アイチウイルス	1
	アデノウイルス型別不明	1
計		641

2　細菌検出状況

三類感染症の腸管出血性大腸菌感染症患者から分離された菌株（18 株）について血清型の検査を実施したところ次のとおりであった。

分離月日	血清型	毒素型
5.7	0157:H7	
7.14	0157:H7	
7.19	026:H11	
7.24	0157:HNM*	
8.13	0157:H7	
8.20	0157:H7	
9.11	026:H11	Stx2
9.14	026:H11	Stx2
9.14	026:H11	Stx2
9.14	026:H11	Stx2
9.15	026:H11	Stx2
9.15	026:H11	Stx2
9.18	026:H11	Stx2
9.21	026:H11	Stx2
9.22	026:H11	Stx2
10.5	0157:H7	Stx1,2
10.5	026:H11	Stx1
10.16	0157:H7	

＊:非運動性